
Life Is Reborn

GETTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i f e I s R e b o r n

【Nコード】

N 9 4 4 6 C

【作者名】

G E T T E R

【あらすじ】

人類の未来を守るため、己の命を犠牲にして散っていったTF戦士、ダイノボット。彼がふと目覚めると、なんと人間の姿に変わっていた。そして、彼が第二の生を歩む場所は……麻帆良学園であった。

プロローグ【生まれ変わった日】（前書き）

どうも初めまして、作者のGETTERと申します。

この作品は『ビーストウォーズメタルス』と『魔法先生ネギま!』のクロスオーバー作品です。その点を了承してお読みください。

プロローグ【生まれ変わった日】

【SIDE：俺】

体が動かない。あちこちが痛い。思考回路もあまり反応を示さず、簡単な返事しか返せない。

アイセンサーに砂嵐が徐々に広がり、目の前の光景がボンヤリとしか見えない。

辛うじて見えるのはこんな俺を受け入れてくれた大切な仲間達の悲しい顔だ。

「良くやった、ダイノボット。お前はこの谷を救い、未来を救ったんだ」

ああ、俺の名前はダイノボットだったか。ダメージが限界を超えすぎて思考回路があまり働かねえんだよな。

メガトロンの野郎、最後にキツイ一撃を喰らわせやがって。

でも奴の歴史改革と言う野望を阻止出来たし、胸に傷跡も残してやったから良しとするか。

そんな事を身体中が痛い中、考えているとコンボイが隅に居たラットルを俺の前まで連れてきた。

「アンタ、声も態度もデカイ口裂け恐竜だけど……ガッツは良い奴だったよ」

そんな今にも泣き出しそうな顔をしながら無理に言うんじゃないよ、このチビネズミ。

でもテメエともこれでお別れだな。

「良い凸凹コンビだったよな……俺達」

いつもつまらない事でケンカしていた俺の言葉にこいつは嬉しそうに「うん」と頷いた。
少しの笑顔を見せて。

つたく、無理しやがって。

まだ少しだけこいつらと話したいが、身体中の回路がビービー警告してやがる。

そろそろらしいな。

「もう思い残す事はねえ。……あばよ」

生まれ変わったらまたお前等の仲間になりてえよ。

お前等サイバトロンからは沢山の事を教えて貰ったからな。
友達や仲間を大切にする事、自然を愛する事、戦士としての生き様、
沢山の事を教えて貰った。

あばよ。俺の……大切な……仲間達。

「……………さみい」

突然としか言いようがない。身体中に走るあまりの寒さに俺の意識は覚醒し、目の前の光景を見た。

木々が沢山生えてやがるし、空には月が出ているから今は夜らしかった。

……………待てよ。

俺は確か死んでトランスフォーマー（以下TF）の魂が^{スパーク}集まるマトリクスへと旅に出た筈なんだが……何故に俺はこんな所に居るんだ？……まさかもう生まれ変わりをしたのか？

いや、生まれ変わるにはかなりの準備期間が必要だ。

それより何より、マトリクスに辿り着くまでも、長く果てしない旅になる筈だ。

「訳解んねえ。俺は一体どうなっちまったんだ？ しかもここは何処だ？」

とりあえず俺は立ち上がり、少し辺りを歩いてみることにした。周囲に警戒心を配りながら歩いてみたが、何も無い。

「見た限り普通の森だな。畏も何も無さそうだ」

そして俺が林の辺りに差し掛かると、ある物が見つかった。それは俺の愛用のサーベルだった。それが目の前で無造作に転がっていた。

確かに俺は戦闘用に必ず1本は持ち歩いてた。でも何でこんな所にあるんだよ……。

まあせつかく愛用の武器に会えたんだ。
置いていくのもなんだし、持ち歩くとするか。

「ダー？ 今更だけど俺の手ってこんな形だったっけ？」

サーベルをひとつとした俺の手は明らかに小さい、と言うか形がおかしい。この手はまるで人間の様な……。
この手だと両方使わなければサーベルが大きすぎるし、重くて持てねえ気がする。

持ち手の方はなんとか収まる方だ。

「ダー、本当に今更なんだが……俺の姿ってこんなだったっけ？」

俺は今の状況を必死に整理した。俺の今の姿を確認してみると戦闘ロボモードでもない、ビーストモードでもない……と言うかありえん！？

何でゴールデンディスクに記された未来の記録でしか見た事がない人間の姿になってんだ！？ ご丁寧に服までちゃんと着ているし！？

俺なりに色々考えた結果……今の俺の姿は人間と言う事だ。

「ダー、何だよ何だよ。本当に訳が解んねえ。死んだと思ったら人間の姿になってやがるし」

まるで某人気漫画の大佐殿が言った現象っぽい感じがする。
TFって死んだら人間なるのか？ こんな体験は生まれて初めてだ。
まあ何回も死んでるわけじゃねえし、当たり前だが。

突如起こった事態に苦悩しているとグウーと腹の音が鳴った。

こんな事態になっても体の方はお構いなし、らしい。

「腹減ったな……人間ってのは不便だぜ。TFの時はエネルギーパイプを繋げてジツとしてりゃ良かったのに」

たまにライノックスがエネルギー物質を混ぜ込んだおでんやハンバーグ、カレー等を料理してくれたりした事もあった。そんなに工夫しなくても俺はエネルギー補給が出来ればそれで良かったんだがな。

まあとにかく食い物を調達しに行くとしよう。こんな所で突っ立つたままでも状況は何も変わらない。

そう決めた俺は更に先に進んでみる事にした。

「ふう……やっと川がある所に着いたぜ」

深い森の中をあちらこちら歩き回った結果、ようやく魚が生息してそうな川に辿り着く事が出来た。

月の光に照らされた川の水が妙に綺麗だった。

更に森の中を歩き回っている内に解った事が2つあった。俺が居たのはどっかの山である事。

そしてもう一つ、俺は人間の姿をしているだけで身体能力は戦闘口

ボモードと変わらなかった事だ。

それ故に今の体では大きすぎるサーベルも片手で持てる（持てないと思ってたけど）。

TFだった時には普通のサーベルだったが、人間の姿で持つと一種の大剣に近い。

人間の視点からすると俺の持ってたサーベルってこんなだったのか……っと、今はこんな事を考えている場合じゃねえ。食料を探さねえと。

川を覗き込んだは手頃な魚がいるか見てみた。

影も形もない。魚も夜は眠ってるのか、それともここに魚は住んでないのか。

「ダー、嘘だろ。こんなのってありかよ」

「その御方、どうしたでござるか？」

「あ？」

後ろを振り返ってみると長身で変わった服を着た人間の女が立っていた。俺が第一に注目したのは目だ。

細え、超細え、あれで物が見えてるんだろうか？

そんな俺の視線を感じ取ったのか、細目の女が俺の側までやってきた。

「何処かケガでもしているのでござるか？」

心配そうな様子で俺に聞いてくる細目の女。多少警戒しつつ、俺は言った。

「違う。突然山の中で気が付いて、スゲーありえねえことだらけで戸惑って、腹が減ったから山道を歩き回って、やっと食いモンがありそうな川に着いて、食える手頃な魚を探してみたら1匹もない事に絶望してただけだよ。……ダー」

「そ、それは大変だったでござるな」

言葉からでも解るが、細目女が俺に哀れみの視線を送ってきた。

細目女め、そんな目で俺を見るんじゃないよ。

「どうしたもんかなあ……俺」

「……そうでござる。拙者はこれから夕食を食べる所でござるが、一緒にどうでござるか？ 拙者が調達した食料は1人えても困らないくらいにはあるでござるよ」

細目女の突然の提案に俺は耳を立てた。

かなり嬉しい申し出だが、甘えても良いのだろうか。

「……良いのか？ 一緒に食っても」

「困った時はお互い様でござる」

この細目女は結構良い奴かもしれない。

こんな所で絶望していた見ず知らずの男にここまでしてくれるとはな。

でも正直助かった。もちろん俺はこの申し出を受け、細目の女の後を付いていった。

細目の女に付いていくと1つテントが張ってある場所に着いた。どうやらここでコイツは寝泊まりしているらしい。

テントの側には焚き火の準備もしており、川から獲ったんだろう魚も何匹があった。

細目の女は手早く火を焚き、魚を串に刺して焼き始めた。焼き終わるまで俺は只ジツと待つ。

腹の虫が鳴らない様に一応腹に力を込めておいた。

そして焼き終わった魚を細目の女は俺に差し出してくれた。渡された魚を遠慮無く俺は頬張った。メチャクチャ美味い。

遠慮無しに俺は渡された分だけの魚を綺麗に平らげた。

細目の女の方は俺のことばかり見てて2、3匹しか食べなかった。

「美味かったぜ。ありがとよ」

「礼には及ばないでござるよ。ニンニン」

礼を言っても細目女は穏やかな態度を変えなかった。

人間にしちゃあコイツは良い奴だ。

ゴールドディスクを見た限りではロクな生き物じゃないと思ってはいたが。

もしかしたら人間にもサイバトロンの様に心の優しい奴もいるんだろつ。

どの生き物でもこんな事は当たり前か。

満たされた腹をさすりながら俺はボンヤリと空を眺めた。星がいくつも輝いていた。

天体観測が趣味のコンボイが好みそうな星空だ。

「紹介が遅れたでござるな。拙者は長瀬楓と言つ者でござる。お主、名は何と言つでござるか？」

長瀬楓つて言うのかコイツは。しかしどうするべきか。

名前を言つてやりたいが、本当の名前を言つ訳にもいかなだろう。ダイノボットだつて言つた日には変わった名前だと認識されてしまう。

今は人間なのに、TFの時の名前のダイノボットと言つのは何かマズイ気がする。

「悪い。お前の名前を教えてもらつておいてなんだが、今はまだ言えねえんだ」

俺の答えに長瀬は表情を変えずに「訳ありでござるか？」と聞いてきた。

その問いかけに俺は頷く事しか出来なかった。

「そうでござるか。なら拙者は無理には聞かないでござる。お主が自分から話してくれるのを待つでござるよ」

「すまねえな。助かるぜ」

色々と助けてもらった長瀬に俺は罪悪感を感じずにはいられなかった。

俺の事は近い内に絶対に話しておきてえな。

でも名前の件は深刻だな。TFの時の名前がダメなら人間の名前を
考えなくてならない。

……良い名前を考えておこう。俺の足りない頭じゃロクな名前は思
いつかないかもしれねえが。

「夜も遅いでござるし、今日は寝るとするでござるよ」

「そうだな。心なしか、俺も何か疲れてきたし」

俺は長瀬から毛布を2、3枚貰ってテントの外で寝る事にした。
長瀬は俺に「お休みでござる」と言っテテントに入ッテ行ッテ。
俺も少しの間を開けながらも、「ああ」と返した。

「明日になッテからまた考えるか。これからの事を……」

毛布に体を包み、俺はまた空を観た。
さつきと変わらない様子の星空だッテ。

出会い編：第1話【編入して良いのかよ】

【SIDE：俺】

「良い天気だ、快晴って奴だな」

俺は日の出と共に目を覚ました。テントを覗いてみると長瀬はまだ眠っている。

だが、一見ぐっすり眠っている様にも見えるが、スキが一切見あたらなかった。

コイツも戦士の様な臭いがするのは確かだ。まっ、俺には適わないかもしれないけどな。

「山の中からシュミレーターなんかある訳がねえし………しょうがねえ、自主トレをするか」

サーベルを片手に持った俺は昨日の川に向かう事にした。そもそも知っている手頃な場所はそこしか知らない。

そうだ、自主トレついでに魚も採ってけるとするか。長瀬があんなに採ってるんだから絶対に何匹か居る筈だ。

朝食も長瀬の世話になる訳にはいかねえし、少しぐらいは礼をしたいな。

サーベルの素振り、木に向かったの打ち込み等を一通りやり終えた後、俺は朝食の調達をする事にした。

川を覗き込んでみると昨日の夜とは違い、魚が何匹も生き生きと泳いでいる。

川に足だけ入った俺はサーベルで泳いでいる魚を的確に突いていき、仕留めていった。

「よし！ これだけあれば充分だろ」

近くにある石に採った魚を置いていく。

10匹ぐらいは採ったな。これだけあれば朝食には充分だろう。

「しっかしまあ……俺が人間になるとこんな顔になんだな」

涼しい風に当たりつつ、俺は水面に自分の顔を写して見た。

髪の色は茶色で目の色が黒色、左の頬にはやっぱりあると思った3本傷。

この傷はコンボイと初めて出会った時、1対1の対決の時に出来た傷だ。

顔はまあ悪くはない。しいて言えばごく普通だ。

身長もトランスフォーマーの時は2m以上をあったが、人間になっても190cmくらいはある。

「一人で何やってんだか。さっさと長瀬の所に戻ろうつと」

今自分がしていた行動に呆れつつ、右手にサーベル、左脇に採った魚を持って長瀬が眠っているテントに向かった。

それにしても魚が持ちにくいったらない。ダンゴみたいにサーベルに全部突き刺すか？

「お帰りでござる」

テントに着くと長瀬はもう起きたらしく、笑顔で俺を迎えてくれた。目は細いから視線は解らないねえが。

「おう、朝食採ってきたぞ」

「おお、かたじけないでござる」

採ってきた魚を渡すと長瀬は焼く準備を始めた。流石に俺も見ているだけではつまらないので手伝う事にした。

2人でやると案外朝食の準備は早く終わり、串に刺して焼いていた魚もあつという間に焼けた。

相変わらず良い匂いがしてきやがるなあ。

俺がヴェロキラプトルをスキャンした時には腐った生肉が好物だった。

しかし今それを食ったら間違いなく腹を壊すだろうな。もしかしたら死ぬかもしれない

「やっぱり魚はうめえな」

長瀬から手渡された魚を受け取り、俺は豪快に頬張る。
味付けに振った塩の味と魚の味が口内に広がる。やっぱり美味い。

「昨日と変わらず、豪快に食べるでござるなあ。慌てて食べると喉に詰まらせるでござるよ」

俺の豪快な食べ方を見ていた長瀬が苦笑いで言ってきた。
生憎だが、俺は今まで喉に詰まらせた事はない。

「男はやっぱり豪快に食わなくちゃな。チヨビチヨビ食ってたんじや割に合わねえんだ」

「そうでござるか」

たわいのない話をしながら朝食を食べる俺と長瀬。

こんな ゆっくりとした朝食を食べるのって久しぶりかもしれないな。

「さて、拙者は山を下りるとするでござるよ」

「そうか。ありがとよ、こんな正体の知れない俺を助けてくれて。お前も勉強頑張れや」

実は昨日の夜、就寝前に暇つぶしに長瀬とお互いの事を話したりした（俺は口クな事は話せなかったが）。

長瀬はこの近くにある麻帆良学園とか言う所の生徒らしく、まだ中

学生らしい。

まだホンのガキだったのに相当の実力を持っていると言う所に俺は一番驚いた。

俺が背を向けてその場を去ろうとすると長瀬が俺の肩を突然掴んできた。

「？ 何だ？」

「いやいや、お主も一緒にどうかと思って」

「……………ダー？ 何で俺が長瀬と一緒に行かなければならねえんだ？」

突然の事に俺の顔は多分間抜け面になってると思う。
だって誘われる理由が皆無だ。

「何で俺を誘うんだよ？」

「お主、昨日の話によれば行く所が無いのでござろう？ 拙者が通う麻帆良学園の学園長殿が仕事か何かを紹介してくれるかもしれぬ。どうでござる？ 学園長殿に一目会ってみるでござるよ」

「……………」

何かここまでしてくれると俺がスゲー悪者の様な気がする。

かと言って本当の事を話す訳にもいかねえし、なにより信じてくれないだろう。

でもここで断るとせっかくの厚意を無駄にしちまう。

どうすれば良いんだ俺……………。

「ここが学園長室でござる」

「ダ〜……」

考えた末、俺は長瀬の厚意を受ける事にした。
山を下り、長瀬に付いていくと麻帆良学園とやらが見えてきた。

そしてその学園のデカさに俺は驚いた。

これは一種の街だ。セイバートロン星の街とタメを張れるかもしれない。

そして長瀬が通っていると言う麻帆良学園中等部に向かい、学園長が居る所まで案内してもらった。
そんで今はその部屋の前に居る訳だ。

「失礼するでござる。学園長殿」

長瀬が部屋の扉を開けて中に入った。
俺も続けて入って行くと目の前に信じられない光景が広がっていた。

「んん？ 長瀬君か。ワシに何か用かね？」

うわぁー……見た目からして人間のじじいだろうが、あの頭の長さは何だ？
人外じゃん。タコか？ タコの頭か？

「何だ？ このタコと人間が混じった様なじじいは？」

つい思った事が口に出てしまった。

俺の言った事にこの空間の空気が少し冷えた。

「タコなんか混じつとらんわい！！　ワシは純粋な人間じゃー！！」

「嘘言うな！　んな頭の人間がこの世に居てたまるかぁー！！」

「なんじゃとー！！」

「が、学園長殿。落ち着くでござるよ」

顔を真っ赤にして怒るじじいに俺は「ますますタコだ。いや、湯でダコだ」と思った。

今にでも頭から湯気が出そうなくらい怒っているじじいを長瀬が必死に宥める。

何分か宥めた結果、ようやくじじいが落ち着いた。

「ふう……ワシとした事が。それで、お主は一体何者じゃ？」

「人に訊く時はまずテメエから」まあまあ。それは拙者から説明させてもらうでござるよ」ぬぐっ……」

長瀬がじじいと話している。当然俺の事だろう。

この部屋に居るんだからあのじじいが長瀬が言っていた学園長とか言う奴なんだろうが、本当に人間かよ。

俺が心中で毒を吐いていると二人の話が終わったらしい。

扉の近くに下がっていた俺はじじいに呼ばれた。

「まあ先程の事は水に流そう。ワシは近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしている」

変な名前だ。まるでタイガトロンの好きな時代劇に出てきそうな名前だぜ。

「長瀬君から話は聞いた。大変じゃったの」

「別に。もう気にしてねえよ」

「ふむ、ワシとしても困っている者は見捨ててはおけん。君がここで何かしたいと言うならばその場を与えないでもないが、どうするか」

死ぬまで戦士として戦ってきた俺にそんなモンを求めるなよ。それにやりたい事なんざ何もねえ。

「特にやりたい事はない。それに無理しなくても良いんだぜ。自分の事は自分で何とかするから」

心からの本音だったが、じじいは困った様な顔をしてきた。なんでそんな顔をされなくちゃいけないんだよ……。

じじいが頭を捻らせていると良い考えが思いついたのか、急に表情が明るくなった。

何かロクでもない考えの様な気がするのはいのせいだろっか？

「どうじゃ？　ここで学園生活してみないかの？　君は見た目若そうじゃし、中等部でも通用するかもしれん」

「…………ハッ？」

何を言い出すんだこのじじいは。俺にもう一回学生をやれと？　デストロンだった時に経験した学生をやれと？

「何言ってるんだよ。長瀬から聞いたけど、ここは女だけが通う所だろ？　男の俺が通える訳がねえだろう」

「もちろん出来るなら男子の方へ編入したいんじゃが、生憎どこの

クラスも人数が多くて満席での。唯一空きがあるのがここだけなんじゃ。まあ丁度男女共学の事を考えておったし、お試しと言う事でどうじゃろつか」

ちくしょー……このじじいの背中に黒い何かが見えやがる。明らかにさっきの悪口を根に持つてるとしか思えねえぞ。

「どうするんじゃ？ ん？ どうするんじゃ？」

この嫌味な聞き方は何だ？ 意外に執念深いじじいだ。それにこの雰囲気からすると申し出を受け入れるしかねえじゃねえか。

「分かったよ……何処へでも編入しやがれ」

「そうかそうか。それは良かった。ワシに出来るのはこれくらいじゃからな」

「良かったでござるな」

ハハ……そうだな。お前等にしてみれば良かっただろうが、俺にとつては最悪だよ。

経験済みの事をもう1回やるんだからな。

「しかしどうしようかの。名前も言ってもらえないのは困るのう。色々と不便じゃし……いっその事、仮の名前をワシが命名しちゃうか」

「お、おい……」

そこまで世話をせんでもええわ！！ って言いたい所だが、実際人間の時の名前を思いついてないのが現実だ。

……この際だから命名してもらうか。俺が考えたんじゃ変な名

前になりそうだし。

「あー……それでも良いぜ。但し、良い名前にしろよ」

「本当かね！ ワクワクするのう、どんな名前にしようかのぉ」

自分の横にあるバカでかい本棚から色々和本を取り出し、ページを捲っていくじじい。

名前を付けるぐらいでそんなに嬉しいがるか普通。

「きっと生まれた孫に命名する気分なのでござろうな」

「あんなタコの末裔みたいなじじいの孫にはなりたくねえがな」

本を読み終わった後も顎の長いヒゲをさすり、考えているじじい。どうやら読んだ本の中には良い名前は無かったらしい。

「名前、名前、名前………」

「おーい。そこまで真剣に考えなくても良いぞ」

俺が声を掛けてもじじいはどっか別の世界に意識が飛んでいる様子だ。

長瀬に助けを求めても長瀬自身困っているらしく、冷や汗をかいていた。

さっさと決めてくれよ。

名前ぐらいであまり時間を掛けるなよな。

「……………うむ、決めた！」

「おうおう、やっと決まったか……………」

「うむ。今日から君の名前は“恐山剣山”で決まりじゃ」

……………な、なんだか元の名前とそう変わらない様な気がする。
それに俺のビーストモードから名付けられた気もする。
んなことは絶対にあるわけねえが。

「学園長殿、何故にその名前にしたのでござるか？」

「うむ。昨日ワシが暇つぶしにやった有名ゲームの主人公からじゃ」

「……………」

ゲームの名前からかよ。なんつー無理矢理で適当な。

でも一応決まった訳だし、とりあえずは良しとしよう。

「名前が決まったのは良いんじやが、どこのクラスに編入させようかの」

「そこら辺はもうじいさんの好きにしる。俺は何でも良い」

「それで良いのならそうする。それと君は今日何処で生活するんじや？ 部屋を用意するにしても明日になってしまつが」

そんな事は別にどうでも良い。また山に戻れば過ごせる。

その事を言おうとしたら長瀬に手で口を塞がれてしまった。

「それなら拙者の部屋に来れば良いでござる。他に2人ほど住んではいるが、1日ぐらいは大丈夫でござるよ」

おいおい！ 流石にそこまで世話になる程俺は落ちぶれてないぞ。
断ろうとしたが、言いくるめられて無理矢理了承させられてしまった。

情けねえ…………。

「それでは拙者の部屋に行くでござるよ。ダイノ殿」

「解つたよ…………」

気の無い返事を返す俺に長瀬はちよつと苦笑した。
仕方ねえだろ、不本意なことばかり続いてんだから。

「編入先については明日伝えるから早めにここに来るんじゃぞ」
「へえへえ……了解しました」

もう脱力していて体に力が入らん。流れに身を任せるしかない。
学生になっちまったが、これから一体どうなるんだよ。

【SIDE：近衛近右衛門】

「ふむ……奇妙な青年じゃったな」

最初の印象もそう、奇妙な青年としか言いようがなかった。
あの青年からは何か普通の人間とは違う不思議な何かを感じる。
それに長瀬君が言っていた持ち前の高レベルの身体能力や素性も気になる。

実際あのドリルの様な刃をした奇妙な大剣を軽々と片手で持っていたし、力も相当な物じゃ。

「ダイノ君か……見た限り悪い青年ではないかもしれんが、暫くタカミチを監視に付けるとしようかのお」

実際この生徒になったからにはヤンワリと行動を起こす事は出来ないと思うが、警戒はしておくに越したことは無い。

部屋に招き入れた長瀬君も警戒はすると思うし、長瀬君も相当の実力者じゃからな。

今はとりあえず様子見、じゃの。

出会い編：第2話【破天荒なクラスだな】

【SIDE：俺】

「朝食が出来たでござる。早くテーブルに着くでござるよー」

「はい」

「今行くです」

朝食の良い匂いが俺の鼻をくすぐり、食欲をそそる。

長瀬の部屋に一泊した俺は既に朝食が並べられているテーブルに着いている。

「今日も美味しそうです」

「ちゃんと顔と手は洗ったでござるか？」

「うん。バッチリだよ」

どうやら長瀬がこの部屋で主導権を握っているらしく、同室のチビ双子は素直に長瀬の言う事を聞く。

《見た目からしてもこいつ等は上下関係がハッキリしてるもんな》

俺がこの部屋に一泊すると長瀬が言った時はチビ姉妹のテンションが急上昇、快く迎え入れてくれた。

その時のテンションの高さは思わず女版のチータスを思い浮かべてしまった。

快く俺を迎え入れてくれたのは別に良いんだ、うん。

だがチビ姉妹はイタズラ心と言うモノを少しは抑えられないのだからか。

チビ姉妹がするイタズラはハッキリ言ってラトルより質が悪い。
実際昨日寝るまでに3回くらいキレそうになったが、すべて長瀬が
「まあまあ」と俺を抑えた。

「やっぱり楓姉のご飯は美味しい」

チビ姉妹の姉である鳴滝風香、長瀬の作った朝食を美味そうによく
食べている。

俺は主にコイツが仕掛けるイタズラに困らされている。

「本当です」

チビ姉妹の妹である鳴滝史伽、こちらも姉と同様に美味そうに食べて
いる。

コイツの仕掛けるイタズラは姉と比べるとまだ可愛いモノだ。

しかしこいつ等が協力すると話は別、イタズラは凶悪化する。

個人個人のレベルならまだ我慢出来る方だが、協力されると本当に
質が悪い。

長瀬もよくこの2人と暮らせるもんだ。

「朝食ぐらい静かに食べねえのか？ お前等は」

「もう、そんな固い事言わないでよケン君」

「朝からそんな不機嫌な顔はダメです」

「名前を略すな。それと俺の顔はいつもこんなモンだ」

この部屋に来てこのチビ姉妹は俺の呼び方を“ケン君”で定着させ
た様だ。

好きに呼べと言ったが、流石にお前等それはないだろう。

まだ長瀬が言う『剣山殿』の方がずっと良い。でもチビ姉妹の『ケン君』とラトル達が呼ぶ『口裂け恐竜』や『しましま恐竜』や『ダーダー野郎』と比べると遙かにマシだが……。

とまあ、下らない事を考えている内に朝食を食べ終わった俺はじじいの居る学園長室に行く事にした。
今日は俺が編入する事になるクラスを言い渡されるからだ。

「じゃあ俺はもう行くぞ。この寮の他の連中に見つかったらうるさいからな」

「あいあい。気を付けて行くでござるよ」

「ケン君！ 中等部に来て僕達のクラスメイトになれると良いね」

ああ、それは万が一にも無いだろう。つーかお断りだ。

学園通つてまでお前等のイタズラ攻撃を受けたくないからな。

「入るぞ。じじい」

俺が学園長室に入るとじじいの他にメガネを掛けた中年の男と子供の2人が居た。

何者だと俺が二人を凝視していると中年の男が俺に声を掛けてきた。

「やあ、学園長から話を聞いているよ。僕はこの学園の広域指導員をしている高畑・T・タカミチだよ。よろしく」

握手を求めてきたので俺はそれに応えた。

握手して解ったが、この高畑と言う男は穏やかそうな顔をして結構な実力者だ。

長瀬といい、高畑といい、面白い奴等が揃ってやがる。案外この学園に編入と言う話を受けて良かったかもしれない。

「フオフオフオ。剣山君、紹介しよう。君のクラスの担任のネギ・スプリングフィールド君じゃ」

そう言ってじじいは高畑の隣に居た子供を前に出して紹介した。

……これは流石にマズインじゃねえのか？

兵士として育てるならともかく、こんな子供が担任をしているだと？

まあ男の俺を共学のお試しとか言っただけの所へ編入させるくらいだ。

このじいさんは面倒な奴等にバレなけりゃ良いとでも思ってるんだろう。

「こんにちわ。中等部3-Aの担任をしているネギ・スプリングフィールドと言います。これからよろしくお願いします、剣山さん」

「あ、ああ……よろしくな」

意外に真面目だ。大抵の子供と言ったらクソ生意気な奴等が多い（俺が思う生意気な子供と言えばラットルとかラットルとかラットルとかラットルとか……）。だがコイツはまったく違う。

ネギ先生……か。見た目は頼りなさそうだが、案外かなりやり手っ

ばいな。

それにしても中等部のクラスの連中と俺は上手くやっていけるだろうか。

ぶっちゃけ言うともあまり自信が無い。元々俺って付き合いつて言うモンが苦手だ。

せいぜい派手なケンカとかは起こさない様に気を付けるとするか。

だが3 - Aって何処かで聞いた様な気がする。

それもとつても近い内に。

「では剣山君。そこにある制服を着てくれたまえ。それと横に置いてある通学バッグには教科書類が入っておるから確認しておくんじやぞ」

「分かった」

頭の中で3 - Aと言う言葉を思い出そうとしている時にじじいから声を掛けられてしまい、途中でシャットダウンした。

おいしい、もう少しで思い出せたかもしれないのに。

仕方なく、じじいの言われるままに俺は隣の空き部屋に行つて制服とやらに着替えた。

着替えたんだが……………慣れねえ、こういう堅苦しいのはやっぱり全然慣れねえ。

人間の姿になつても慣れねえ。つーか慣れる訳がねえ。

「うわぁ、とても良く似合ってますよ。剣山さん」

空き部屋から出てきた俺の姿をさっそく褒めてくれるネギ。それは世辞なのか？ それとも本音か？

正直俺自身は全く似合っているとは思っていない。
逆にこういうのは息苦しくてしょうがない。
俺が内心そう思いつつ、苦笑いでネギに応えた。

「頑張るんじゃぞ。剣山君」

「ああ。ボチボチ頑張るよ」

じじいが高畑に軽く頭を下げ、俺は教室に案内してくれると言っネギの後を付いていった。

「ここです」

「ここかあ」

案内してもらい、3 - Aとプレートが付いた教室の前に俺とネギは居た。

それにしても中は騒々しいな。他の教室の奴等は静かなのに、このクラスだけ別空間って感じだぞ。

「それじゃあ僕が呼んだら教室に入ってください。それまでに自己紹介のこととか、考えておいて下さい」

「ああ」

ネギが教室に入るのを見届けて俺はとりあえず深呼吸をした。
これから周囲が俺以外全員女の未知の教室で生活する事になる訳だ。

しかしそれなりの覚悟と言うか、決意って物がある。

俺が深呼吸を繰り返しているとネギから「どうぞ、入ってきて下さい」と聞こえた。

最後に深い深呼吸をしたあと、俺は意を決して教室の中へ入った。

《何だ！？ この静けさと俺の身体中に感じる視線の数は！？》

俺が教室に入るとさっきまで騒がしかった教室が静寂に包まれた。さっきの騒がしさはどこ吹く風、と言った所か。

ものスゲー居づらさを感じつつ、ネギが居る教卓の所まで行った俺は一応身体を整えた。

「僕達の新しいクラスメイトです。剣山さん、自己紹介をお願いします」

内心冷や汗をダラダラ流していた俺は数秒間ネギへの返事に遅れた。そしてテンパリつつも、俺は自己紹介をする事にした。

「あゝ……新しくここのクラスメイトになる恐山剣山だ。何というか……よろしく」

「……」

《だから何で静かなんだよ！？ さっきみたいに騒げよ！？ 俺がメチャクチャ気まずいんだよ！？ 俺の気持ちを解れよ！？》

「ちょっとお待ち下さいネギ先生！」

なんか前に座っていた金髪の女が席を立て机をバンと叩いた。

うんうん、良いリアクションをしてくれる。
いつまでも固まってくれたままだと流石に困るんだよな。

「何で男子生徒の方が女子中等部に！？ 私は納得がいきませんわ！？」

「いいんちよさん落ち着いて下さい。これには深い事情があるんです。学園長先生もその事を解っています」

ネギが俺の事を連中に説明し始める。

男女共学の事を話すと教室中が少し騒がしくなった。

そんなに驚くなよな 　　ん？

「……………（ニコツ）」

「「ヤッホー」」

俺の目は幻覚を見ているのだろうか。

なんか俺に向けて手を振っているチビ姉妹とニコリ笑いながら俺の方を見ている長瀬の姿が見えた様な気がした。

目を擦ってもう一度見てみるが、光景は変わらない。

《そうだった！ 3-Aと言うのはあいつ等のクラスだった》

今更思い出した自分に若干アホさ加減を感じる。

何で思い出せなかったんだろう。

……………途中で思考をシャットダウンしてくれやがったじじいのせいかな？

「学園長の決定なら仕方ありませんわね。少し不安はありますが…

…」

俺が長瀬達の方を呆然と見ているとネギの説明が終わったらしい、

最初に抗議した金髪女が納得した様子で座った。他の奴等からも「男の子か」や「なかなかイケてる感じ?」とかの声が聞こえてきた。

まあ男が転入してきたら驚くのが普通だろう。まだ腑に落ちない奴等が居てもしょうがない。

「それではですね、剣山さんの席ですが……何処にしましょうか?」

「あ……右端の一番奥でいい」

「分かりました。じゃあそこに座って下さい」

「へいへい」

バッグを持って俺は右端で一番奥の席に座った。

そこまで行く時も座った時も視線がスゲー集まりやがる。そんなに見つめてくるな。

「それではHRを終わります。1時間目の授業の準備をして下さいね」

ネギがそう言って教室から出て行くと俺はすぐさまクラスの奴等に囲まれ、色々と質問をされた。

俺ってこういうのは苦手だから勘弁してほしいんだが、初日からクラスの気分を害したくはない。

出来る限り、俺は答える事にした。

「趣味は何?」

「体鍛える事だな」

「好きな食べ物?」

「……肉だな。よく焼いた奴」

「どうしたらそんなに身長が高くなるの?」

「体鍛えてりやなるぞ」

「恋人持ち？」

「《恋人？》そんなモンはいねえ」

数分間の質問地獄が終わり、俺は若干狼狽した。

初日からこんなに狼狽するって、どいうクラスだ？

しかも気が付けば授業の始まりの時間じゃねえか。

ダー……馴染めるかなこのクラス。

出会い編：第3話【監視されてるのって、嫌な気分だな】

【SIDE：俺】

「さみい……」

えゝ皆さんこんちにわ。ダイノボット改め恐山剣山です。

只今時間は解りませんが、夜です。お空の月が綺麗です。吹く風がとても寒いです。

地面に長い時間座りこんでいたからケツがめっさ痛いです。

何で俺がこんな所にいるのか　それは少し前の時間に遡る。

あのじじいに変な決定を下さなきゃなあ……。

「俺の住む部屋が用意出来たって本当か？」

「そうじゃ。部屋には家具などが設置し終わってたから見に行くと良いぞい」

3-Aに来て初めての授業が終わり、俺はじじいに呼ばれた。前に約束していた俺の住む場所の準備が完全に整ったらしい。

俺はさっそく部屋を見に行こうと、じじいから手渡された地図を手にそこへ向かった。

どんな部屋になんだろうな。俺からしてみりゃ、なるべく広い方が

良いんだけど。

「ダー……しかしこの道は何だか知っているような気が……」

部屋に向かう俺は地図に記してある道を歩いていく内に奇妙な違和感を覚えた。

何故なら自分が今歩いている道は今日の朝に通った感じがめちゃくちゃするからだ。

もちろん長瀬の部屋に一泊した時も同じような道を通った気がしないでもない。

目的地に向かえば向かう程、違和感が強くなってくる。

そして目指していた目的地に着いた時、俺の違和感は現実になった。

「おいおい……マジかよ」

まさしくこの地図が指しているのはここだ。一泊した女子寮だ。

この女子寮の中に俺専用の部屋があるらしい。

あのくそじじい……本当に何を考えてやがる。

「今日で色々なイベントが起こりすぎだ……どっかで休もう」

地図をクシャクシャにしてポケットに突っ込み、俺は何処か休める場所を探した。

流石に色々とありすぎて何だか精神的に疲れた。

そして、ずっと座って休んでいて今に至るわけだ。

「今からストを起こして住む所を変えさせてもらうか？ いや、あのじじいの事だ。最悪住む所を用意してくれなくなるかもしれないねえ」

俺がこれからどうするか途方に暮れていると後ろに何者かの気配を感じた。

何だよ、俺の今の機嫌は最悪だっつーのに。今の俺に近づくんじゃねえっての。

「何なんだよいつ……たい……」

俺はイライラしながら立ち上がり、気配がした後ろの方を振り向いた瞬間絶句した。

何だか訳の解らねえ怪物が口からヨダレを垂らして俺の方をジッと見ていたからだ。

しかも距離にして数m、これはやべえな。

【キシヤアアアー！】

「ダァーっ」と！

怪物が俺目掛けて爪を振り下ろしてきた。が、当然の如く俺は避けてやった。

1人の戦士として、あんなミエミエの攻撃をむざむざと受けはしない。

狙った俺を引き裂けなかったのが不満なのか、怪物は低い唸り声を出した。

「この野郎……今の俺の機嫌は最悪だつてのに。まあテメエも運が悪いな、ちよつとばかりウサ晴らしをさせてもらっぜ」

俺は指をパキパキ鳴らし、構えた。愛用のサーベルは朝出る時に長瀬の部屋に置いてきたので手元に無いが、どうって事はない。俺の専門は戦闘、主に格闘戦だ。

今は人間だが、姿が人間なだけであって身体能力等はTFだった頃と変わりはない。

流石によく使っていたレーザーは出せねえけどな。

「おりゃ！」

俺は怪物の顔に狙いを定めて飛び蹴りを見舞ってやった。

蹴りは見事に直撃、怪物は顔を押さえて後ろにドッと倒れた。

歯も何本か折れたらしく、地面に転がっている。

【グオオ！】

トドメを刺そうと近づいた瞬間、怪物が瞬時に起きあがって俺に拳を振るった。

流石の俺もその不意打ち攻撃は避けきれず、攻撃を喰らって吹き飛ばされた。

「痛てて……ん？ あんまり痛くねえ。木がクッションにでもなったか？」

不思議な事に、あまり痛みは感じなかった。かなりの勢いで吹き飛ばされ、木に叩きつけられた筈だ。

これは俺なりの推測だがもしかしたら打たれ強さもトランスフォーマーの時と変わらないのかもしれない。元々の身体能力も変わってない訳だしな。

まあ早い話、俺自身にあまりダメージは無い。服が破けて血が少し出ただけだ。クッションになった木も結構折れていた。でもぶっ飛ばされた事に変わりはない。

怒った俺は逆襲に飛び膝蹴りを再び怪物の顔面に見舞った。

「まだまだ！」

飛び膝蹴りを喰らってまいつている様子の怪物の腹に拳打を何発も打ち込む。

自慢じゃねえが、腕力だけなら俺はメガトロンにも匹敵する。

拳打を何回か打ち込むと、怪物は気味悪い色の血を大量に吐くと倒れ、動かなくなった。

「ったく、編入初日にこれかよ。気色悪い怪物だぜ。オマケに少し臭えし」

「やあ。見事だね」

俺が鼻をつまんで動かなくなった怪物を観察していると奥の林から声が聞こえた。

そこから出てきたのはじじいやネギと一緒に居た高畑だった。

「見てやがったのか。……って、おい！！見てたのなら助けるよ。生徒がこんな怪物に襲われてるってのに！！」

「助けに行こうとしたら君があまりにもそれと互角だったからね。

僕の出番は無いと思って観戦してたんだよ。でも流石に君が吹っ飛ばされた時は焦ったな。ハハ」

「……………」

何そんな普通に笑ってんだよ。圧倒してたからと言って助けに来て

くれても良いじゃねえか。俺が怒り心頭の状態でいると急に高畑の目つきが変わった。

「君は……本当に一体何者なんだい？」

「……それはどういう意味だ？」

「言葉の通りだよ。今の無茶苦茶な戦い方からすると、普通の人間とは到底思えない。」

「……………」

確かに高畑の言葉は正論だった。

普通の人間だったら、あの気味悪い怪物を素手で倒せるわけがない。元々TFだった俺だからこそ、倒すことが出来たのだから。

「ちなみにこの事は、君を手助けしてくれた長瀬君が言っていたんだ。君からは普通の人間とは違う、何か異様な物を感じるってね」

あの二人もずっと前から気づいていやがったのか。

気づいている感じはしなかったが、あの2人……とんだ狸だな。

「そうか。……何ですぐに始末しねえ？ お前等が言う、こんな得体の知れない俺を」

「僕らもすぐにそんな乱暴な事はしないさ。長瀬君が言っていた君から感じる異様な物が気になっていたんだ。学園長も君に長瀬君に言われて初めて気づいたようだけど」

異様な力ねえ……確かにこいつ等程の使い手なら俺からそんな感じがするんだろう。

なんせ俺は元TF、機械生命体だからな。

「かぁ……こんな異様な力を持つ俺をこころに野放しにしたく

ねえから、自分の手元に置いておきたいがために、俺をこんなところに編入させやがったってわけか。あのじじい、なかなか悪知恵が働きやがる」

「それを言われると学園長も形無しだね。とりあえず話を戻すけど、君は一体何者なんだい？ 君がここの生徒になつた以上、僕も1人の教師として手荒な真似はしたくない。正直に本当の事を話してくれないか？」

高畑が真っ直ぐな目で俺を見てくる。思わず本当の事を喋ってしまった。いそうなぐらいだ。

だが、今はまだ話す時じゃない。と言うか話せない。近い内に話そうとは思っているが、その時は自分で決めたい。

「悪いが、まだ本当の事は話せねえ。つーか今話しても信じてもらえねえと思うから話せねえんだ。俺も自分自身に起きている状況が半信半疑だからな」

「……………」

「けどな、これだけは言っておくぜ。別に俺はここで何かをやらかそうなんざ考えてねえからな。お前等に迷惑は一切掛けねえよ」

俺はビシツと高畑に指を指して宣言してやった。

変な疑いを掛けられてこいつ等と戦うのは御免だし、殺されるのはもつと御免だ。

俺が宣言して暫くすると高畑が小さな声で笑い始めた。

何か俺は変な事を言ったのだろうか。

「僕と学園長はそこまで考えていないよ。実は学園長に頼まれて君の事を監視していた。とてもじゃないが、君がここで何かをやらかすとは思えなかったね」

監視してたのか。つーかそこまで思われていないと逆に腹が立つ様な気がするの？ 気のせいかな？ いっそ本当に何かやらかしたるか？

「とりあえず今日の件は学園長に報告しておくよ。剣山君はとりあえず問題の無い生徒だね。暫く監視してくれて頼まれたけど、これなら今日中に取り消しになりそうだね」

「ああ、そうしてくれ。これ以上あのじじいに翻弄されるのは嫌だし、アンタに監視され続けるのも真つ平御免だ」

そう言つて俺に高畑に背を向けた。さつさとこんなところから立ち去りたい。

さみいし、しょうがねえから大人しく、女子寮の部屋に行くか。

「ああ、そうだ。早く女子寮に戻った方がよいよ。君が寮で暮らすと聞いて、3 - Aの皆は歓迎会を開くらしいからね」

「歓迎会……？」

歓迎会か。脳天気な連中だな。

……でも悪い気はしねえな。

「教えてくれてありがとよ。急いで寮に向かうとするぜ」
「どういたしまして」

高畑の奴、何だかコンボイと同じ様な感じだな。

まあそれは置いておいて、早く帰るとするか。

そうだ、長瀬の部屋からサーベルも取つてこねえとな。
忘れない様にしようつと。

出会い編：第4話【報酬が欲しいからなあ。面倒だけど】

【SIDE：俺】

チャイムが鳴り、午前の授業の終わりを告げた。それと同時に俺にとっては至福の時間の始まりを告げるチャイムでもある。

基本的に俺は昼食を1人で食べる。最近はクラスの奴等から一緒に食べないかと誘われたりしているが、俺は全て断っている。

何故なら俺はある場所でゆつくりと食べると決めているからだ。

その場所は……。

「やつぱ屋上だよな。今日はちと遅くなっちまったけど」

買ってきた昼食のパンやおにぎりを手に屋上への階段を上る。俺が食べている場所は屋上なのだ。何故か昼時にはあまり人がやってこない。

なので1人でゆつくりとした時間が満喫出来る。昼食を食べた後の昼寝も最高だ。日がポカポカしていて気持ちが良い。

「さてと。いつもの時間を過ごすとすつか」

ウキウキ気分で扉を開ける俺。

すると目の前には信じられない光景が広がっていた。

「……………」

先客が居た。しかも見た事のある顔だ。確かあいつは俺の前の席の

……ザジ何とかと言う名前だった気がする。まああのピエロメイクは忘れようにも忘れられない。

「……………」

何か気まずい空気が充満している気がしないでもない。

つか何で俺の顔をジッと見たまま黙りこくってんだよ。

……俺の顔に何か付いてるのか？

「おい。俺の顔に何か付いてるか？」

「……………」

黙ったままザジは首を横に小さく振った。悪魔でも沈黙を突き通すつもりらしい。

俺はこの気まずい空気に何とか耐えて扉のすぐ側に座り、買ったパンを口に入れる。

しかしここまで見られているとスゲー食にくい。

この気まずい視線をどうにか出来ない物かね……。

あっ！ そうだ。もしかしたらコイツは昼食を食っていないのからジッと見ているのかもしれない。

そう考えた俺はおにぎり1つを手にとってザジに差し出した。

「ほれ、腹が減ってんだったら見てねえで言えよな」

「！？ ………………」

ん？ 少し表情が変わったか？ ……変わってないか。
最初は俺におにぎりを返したが、もう1回しつくく差し出してやった。

すると観念したのか、受け取って黙々と食べ始めた。
最初から人の好意を素直に受け取りやいいのに。

「美味いか？ 人気商品って聞いたから買ってみたんだけどよ」

「……………」

首を縦に振ったって事は美味いってことらしい。しかもう少し言葉を発してほしいぜ。

まったく言っていないほど、コミュニケーションが取れねえじゃねえか。

俺は扉の近くからザジの隣に座り直し、残っていたパンを食べる。
1人で食う時間も良かったが、たまには2人や3人で食ってもいいかもしれない。

「ふうゝ食った食った」

「……………」

パンを食い終わった俺は勢いよく寝っ転がった。これから日に当たり、空を見ながら昼寝する。まさに至福の時だ。

………… おっ、ザジが急に立ち上がったな。

教室にでも戻るのか？

「……………」

どっから取り出したのか、ナイフやボールを手にとってお手玉みたいに投げ始めた。

おお！！ そのピエロメイクは伊達じゃないってか。物凄く上手いんですけど。

「へ……なかなかやるなあ」

俺が手を叩いて絶賛すると照れているのか、頬が赤い（もちろん無表情）。

意外な発見があつてなかなか面白い。普段は無表情なコイツでもちゃんと照れるらしい。

この芸が終わった後、更に色々な芸を見せてもらった。思わず昼寝の時間を忘れるぐらいに。

昼休みの時間の終わりを告げるチャイムが鳴ると芸は終了。俺とザジは一緒に教室に帰った。意外な奴の意外な一面を見れたので悪くない昼休みだった。

「フオフオ。突然呼び出してスマンの」

「何の用だよじい。せっかく寮に帰ろうと思ったところを呼び出しやがって」

今日一日の授業が終わり、俺は昼休み出来なかった昼寝を屋上でしていた。

そして気が付いたら辺りはもう夕方。寮に帰ろうとした時、高畑から「学園長が君を呼んでいるよ」と聞かされたのでタコじいの部屋に向かった。そして今に至る。

「高畑君から昨日の君の事は聞いた。どうやらワシの取り越し苦労

だった様じゃ。それと君から感じる物についてじゃが……君が話そうと思った時に話してくれば良い。それまでワシ等は待つ事にするよ」

「そいつはありがてえこった。俺も決心が付いたら話すよ」

俺に付けていた監視を外してくれるらしい。

やっと堅苦しい視線から解放されるのか（とは言っても数日だけだったが）。

話がそれだけだったら俺はもう寮に帰りたいんですけど。

「それでは本題に移ろうかの」

「って、おい！ 今の本題じゃなかったのかよ！？」

俺が思わず某人気漫画の嘘つき鼻長青年の様なツツコミをじじいにしてしまった。

だってよ、誰だってあんな雰囲気醸し出されたあとに本題があるなんて思わねえだろ。

今のが確実に本題だと思うじゃねえかよ。

「君に頼みたい事があつての。その頼み事には同行者がある」

じじいからの頼み事……はい、ロクな感じはしませーん。

しかも同行者付きときたもんだ。じじいめ、俺だけじゃ不安らしいな。

じじいが扉の方に声を掛けると女2人が入ってきた。

えっ……？ 2人とも見覚えがめちゃくちやあるんだが。

「あゝ……よろしくな」

「ああ」

「こちらこそ」

じじいからの頼み事、それは俺に学園に出没する鬼（俺が前に倒した事のある怪物がそれらしい）とか学園の物が目当ての侵入者の撃退に協力して欲しいとの事だった。

高畑が昨日の俺の戦闘能力をじじいに報告し、評価しての事だろうと思う。

最初俺は面倒だから断ろうかと思ったが、報酬があると言う事なのでやる事にした。

今日は学園近くのパトロールをするとの事だ（俗に言う警備員だな）。

しかし俺が今日聞かされた事の中で一番驚いた事と言えば

魔法か。……にわかには信じられねえな

そう、魔法についてのことだ。この学園には魔法を使う奴がかなり居て、俺のクラスにも魔法使いが居るらしい（担任を務めているネギもその一人）。

鬼を倒した事で評価され、魔法の存在を教えられた訳だが……俄かには信じられねえな。

「「……………」」

最初の挨拶だけでさつきから無言で前を歩く2人。じじいから紹介された同行者で魔法の事を知っている関係者、俺のクラスに居た2人だ。

褐色肌で長瀬と同じくらいの身長、拳銃等を使う龍宮真名。

神鳴流とか言う剣術を使う桜咲刹那。

学園長から頼まれてこの仕事を結構しており、長くコンビを組んでいるらしい。

そんなベストコンビの中に俺が入っていいのかよ……。

コンビ未経験者ほど、危ないものはないってのに。

「結構いるなあ……」

パトロールを続けていたのだが、桜咲と龍宮が急に奥の林に進んでいった。

俺も後を付いて行くと、辺りから俺達を取り囲むように鬼が出てきたのだ。

数は俺が見た限りでは10体ぐらいで、大きさは俺と同じぐらい。手には鋭い爪が生えている。爪は見るからに殺傷能力が高そうだ。

「うつし！ やるか！」

「ふっ……」

「油断せず、気を付けてやって下さい！」

俺は仕事をする前にわざわざ寮に戻って取ってきたサーベルを構え、正面に居る鬼に突撃した。鬼も当然鋭い爪を振りかざして向かって来るのだが、サーベルで防御。うかつに触れると、刃の高速回転に巻き込まれて、ご自慢の爪が折れるぞ！

内心で警告した通り、鬼のご自慢の爪が音を立てて折れた。痛みからか、呻き声を上げる鬼だが、スキだらけのその首を俺は斬り捨てた。

鬼の首が落ち、体が消滅したと同時に首も消滅した。

「何だ。強そうかと思ったが、見かけ倒しか」

その直後に左右から鬼が俺に襲いかかってきた。そのデタラメな動きは場数を限りなくこなしてきた俺にとって見切るのは造作も無い事。右の奴はサーベルで袈裟懸けに斬り、左の奴には一度距離を置いてから走って跳び蹴りを顔面に喰らわした。

襲いかかってきた鬼2体は消滅、これで3体仕留めた。

「おいっ！ そっちは片づいたか？」

「ああ。3体仕留めたよ」

「私も3体倒しました」

俺が戦っている間に龍宮と桜咲の2人は鬼を3体ずつ仕留めたらしい。

ん？ 三体ずつ？ 俺のと合わせて9体。

確か俺が見た限り、10体ぐらいは居た筈だが……。

「恐山さん！ 危ない！？」

隠れていたらしい最後の1体の鬼が、俺が後ろを振り向いた瞬間に襲いかかってきた。

爪攻撃を俺はサーベルで再び防御。また爪が折れたスキを見て攻撃しようとしたが、発砲音と同時に鬼の手の甲に小さい穴が空いた。

どうやら少し遠くに居る龍宮が撃つたらしい。良い銃の腕前をしてやがるぜ。

腕を押さえて苦しんでいる鬼を、こちらに一直線に向かってきた桜咲が刀で腹を横に斬り裂いて倒した。

「あゝ驚いた。まさか潜んでやがるとはなあ」

「どうやらもう1体もない様だね。パトロールを続けるとしよう」

そう言うのと龍宮が銃を肩に掛けていたケースにしまい、続いて桜咲も刀を鞘に収めた。

俺もサーベルをしまう鞘か何かを作ろうかな？ いつも手に持ってたんじゃ少し不便だし。

「さつきは助かったぜ。ありがとよ」

「いいえ。当然の事です」

「そうさ。仕事をする仲間なんだからな」

俺が桜咲に礼を言うと、その本人は淡々として返した。

龍宮も桜咲の言葉に付け加えるように横から言った。

実際この2人の強さもかなりの物だ。俺も戦いながら2人の戦いぶりを観察していたが、強さはその年齢にしては長瀬と同じで見事だ。としか言いようがない。

まあこの2人が居てくれればかなり心強い。

「まあ頑張って行こうや」

俺がそう言つと二人は頷いて小さな返事を返した。

まあ昼休みに会ったザジにしても、こいつらにしても表情をあまり変えない奴等が多い。

まあ俺も普段は仏頂面なので、人の事は言えねえな、うん。

出会い編：第5話【本を読むのは良いことだ。眺めてるんじゃ意味ねえ】

【SIDE：宮崎のどか】

「んしょ……んしょ」

今私は図書館島に持っていく本を運んでいます。

すぐ後ろには私が所属している『図書館探検部』のメンバーの夕映、ハルナ、木乃香さんが運ぶのを手伝ってくれています。

「のどかー！ 前に気を付けるですよー！」

うん、分かってるよ夕映。

前に私は本を運びながら階段を下りようとしたんですが、躓いて階段から落ちてしまったんです。

でも……私のクラスの担任のネギ先生が助けてくれたんです。おかげで私にケガはありませんでした。

でも、あの時みたいなドジをしない為に目の前にある階段を慎重に下りていきたいと思います！

「あつ……」

私が心の中で決心したのも束の間でした。

突然強い風が吹いて私はバランスを崩し、持っていた本もろとも階段から落ちてしまいました。

あうう……またやっちゃった……。

「のどかー!!」

私を呼ぶ声が聞こえます。前に助けてくれたネギ先生は来る途中、職員室に居たのでここに居る訳がありません。私は今回……助からないみたいです……。

「助けて……いやあー!!」

叫び声を上げてても誰も助けに来れるわけがありません。

私はドンドンと地面に向けて落ちていきました。

これから来るであろう、激しい痛みに怯えながら、私は目を瞑りました。

「あぶるべ!?!?」

あれ? 痛みが全然ありません。

普通落ちたらそれなりに痛みがある筈なのに……。

それに変な声が聞こえたような……あつ!

「な、何なんだ一体……」

下から声が聞こえ、下の方を見ると私が落ちたのは地面ではありませんでした。

その正体は最近私達のクラスに来た少し怖そうな感じが印象的な、新しいクラスメイトの恐山さんでした。

【SIDE：俺】

退屈な授業が終わり、暇だった俺は適当に学園を歩き回っていた。
適当な場所で歩くのを止め、一休みをしようと、俺は辺りを見わた
してみた。

すると階段近くに丁度いい日陰場所を見つけたので、俺はすぐさま
その場所に向かい、大の字で寝ころんだ。

「あゝ……やっぱいいなあ。こういう場所は」

リラックスモード全開の俺はすぐ近くに生えている木々が風になび
く音を聞きながら目を瞑った。

気持ちいいなあ、ここも屋上と同じくらいのにびり出来る場所だぜ。
俺の昼寝テリトリーに加えておこうかな……。

「助けて……いやぁー!!」

あつ！ いけね。何気なく目を瞑っていたら寝ちまったぜ。
でもまだ少し眠い……目がシパシパする。

それよりもさっき悲鳴が聞こえた様な気がしたが……気のせいかな？

ん？ 何かが落ちてくるぞ。何だ……？

「あぶるべ！？！？」

グアアア……不意打ち攻撃かよ。何かと思ったら人が落ちてきやがった。

腹に直撃を受けた俺はカエルが潰れたような悲鳴を上げ、眠気が一気に覚めた。

「な、何なんだ一体……」

「あつ！ ご、ゴメンなさい！？ 大丈夫ですか！？」

謝るより先に俺の腹の上から退いてくれねえかな？

俺がそれを指摘すると落ちてきた奴は顔を真つ赤にしながら慌てて退き、改めて謝った。

コイツは確か……俺のクラスにいる宮崎とか言う奴じゃなかったか？俺って何故かクラスでコイツに異様に避けられてんだよな。

聞いたところによると、何でも“だんせーきょうふしょう”とか言う奴らしい。

要するに男が怖いって事だが、何故に担任のネギは怖がないんだ？

「え、えつと……じゃあ私はこれで」

「おいおい、待てよ。ここら辺に落ちてる本は全部お前のじゃねえのか？」

「あつ……！ 本、本……」

そんなに俺から逃げようとしなくてもいいんじゃないでしょうか？露骨にそんな態度を取られると、俺も少し傷付くんですが……。

よし！ ならイメージ回復作戦に本を集めるのを手伝ってやるか。

俺が素早く自分の周りにある本を集め、宮崎に手渡ししていった。
やがて落ちている本を全部集め終わったのだが……。

「……少し持つてやろうか？」

「あうう……すいません」

身体があまり大きくないくせに大量の本を1度に持とうとするんじゃないか。
やねえよ。

俺は比較的大型の本を宮崎から全部受け取り、両脇に抱えた。

宮崎が持っている残りの本は、漫画本のようなサイズの本が数冊だ。

「のどかー！！ 大丈夫ですかー！！」

「もう！ 心配させないでよー！！」

「ウチ、大怪我負ったと思ってハラハラしたえ」

「う、うん。心配掛けてゴメンね」

階段から次々と本を持ちながら走ってくる奴等が3人居た。全員知った顔だ。

綾瀬夕映、早乙女ハルナ、あのタコの末裔みたいなじじいの孫娘だと言っ、近衛木乃香。

宮崎が事情を全員に説明し、俺は礼を言われた。別にたいしたことじゃねえんだが。

「恐山君で、教室じゃ普段仏頂面で愛想が無いのに、やる時はやるのね。このこの」

「何をにやけた顔してんだよ。気持ち悪いな」

「あゝそれ、女の子に言う言葉じゃないよ」

早乙女が肘で俺を突きながら文句を言ってきた。

言っている意味がよく解らんし、愛想がねえのは余計なお世話だ。
元々俺はこんなんです。

こいつ等から話を聞いてみると図書館島って所に本を運びに行く途中だったらしい。

丁度いい、図書館島とやらには行った事がねえし、本運びのついでに案内してもらうか。

「その本はそっちにお願いするです」

「この本は向こうの棚にお願いな」

「恐山く〜ん！ ちよつと手伝って〜」

「あ、あの、えつと……これをお願いします」

図書館島の中はやたら広かった。一体どれだけの本を詰め込んでんだよ。

綾瀬の話によると地下室も相当の数があるらしく、期末試験でネギと一緒に訪れた事があるらしい。

俺はゆっくり見て回ろうかと思ったが……他の奴等は人使いが荒いっただらねえ。

クラスでは大人しい近衛や宮崎も意外と人使いが荒かった事に少しショックだった。

綾瀬や早乙女は正直予想通りだったが。

「これで終わりだな。ハア」

「お疲れ様、恐山君」

一休みと本棚にもたれ掛かっていた俺に近衛がハンカチで汗を拭いてくれた。

あゝやっぱり近衛は優しい奴だ。

それから続いて綾瀬が「お疲れ様です。どうぞ」と言って既にストローが刺さっている飲み物を渡してくれた。

それを貰い、遠慮無く飲み干す俺だが、飲んだ瞬間に口から勢いよく噴出してしまった。

その飲み物は……抹茶バナナとか言うふざけた名前だった。

「犬の本……か？」

「ええ。なかなか感動する本ですよ」

本の整理を手伝ってくれたお礼にと俺は図書館島を案内してもらっている（とは言っても一般生徒が入れるギリギリの所までらしいが）。俺が本棚から本を取って見ていく度に詳しく解説してくれるので、本にかなり疎い俺には結構ありがたい。

「これは何だ？ 女が活躍する本か？」

「あはっ、良いの見つけたなあ。ウチ、その本大好きなんよ」

「あゝそれね、私も読んだ事ある」

この『図書館探検部』なるメンバーが口を揃えて面白いと言うのだから面白いんだろうな。

………後でコッソリ借りて読んでみるか？ 俺も本自体に興味がないと言う訳じゃない。

俺がガキの頃読んでいた本と言えば………戦術マニュアルが多かったっけ。

「向こうの方の本棚はどんな本があるんだ？」

「向こうはですね……辞書とか、辞典とかですね」

しかし本本当にこの図書館島とやらは本に溢れているな。

参考書や教科書、辞典、童話、漫画、何でも揃っている。

そつえばじじいが本目当てに学園に侵入してくる輩もいるって言うってた気もする。

貴重な本でもあるのか？ 見た限りでは無いが、地下室とやらにあるのかもしれない。

「じゃあ俺は先に帰るからな。お前等気をつけて寮に帰れよ」

結局俺は日が沈むまで図書館島を見学した。

あいつ等はまだ調べ物があると言つので図書館島に残るらしい。

「さ、さよなら」

「じゃあね」

「心配してくれてありがとうとなゝ恐山君」

「バイバイです」

全員でテンポ良く別れの挨拶をしてくれたことにちよつと感動する俺。

まあ今回の件で宮崎が普段感じている俺のイメージが改善されればいいなあ。

ちなみに『女が活躍する本』は秘密でコッソリと借りた。寮に帰ったら早速読んでみよう。

出会い編：第6話【機械にも、動物を愛する心はある】

【SIDE：俺】

「恐山さん」

「ん？ ネギか」

四時間目の英語が終わり、昼食を買いに行こうと教室を出た俺はネギに呼び止められた。

ネギの授業はかなり解りやすい。そこら辺の英語教師より教えるのが上手いのではないだろうか、と俺は思う。

しかし、欠点は授業時間がたまに短くなる事だな。

授業中にも関わらず、委員長の雪広と神楽坂がケンカを始めやがるんだ。

しかも周りの奴等がどちらが勝つか賭けをするから、止める奴は誰もいない。

……俺が見かねて止めに入った事があったが、逆に俺がキレて皆に止められたんだよなあ。

「どうですか？ 編入して少し経ちますけど、クラスには慣れましたか？」

「まあ、大体の奴等とは結構話してるしな。慣れたと言えば慣れたぜ」

ここに来てからかなりの日にちが経った。

近い日にクラスメイト全員で行く修学旅行とやらがあるらしい。

その日までにはクラスに慣れておくと云う課題は果たした。

修学旅行ねえ……何処に行くんだろうか。

「それは良かったです。担任として安心しました」

「おう。気に掛けてくれてありがとな」

ネギは生徒1人1人を気に掛け、心配している。とても10歳の子供とは思えねえよ。

だからクラスの奴等の多くから、子供ながらも慕われているんだろうな。

「はい。それでは」と言つて笑顔を見せながら走っていくネギ。

お前も頑張り過ぎて無理するなよ。

「さつてと、昼食を買いに行くか」

昼食を買いに来たのは良いが、かなりの人数だな。

どこに並んでも時間が掛かりそうだ。

どうか適当な場所に座りこんで、人数が少なくなるのを待つとするか。

えーっと、何処か適当な場所は……。

「やや、剣山殿ではござらんか」

「何してるアルか」

「あつ？ 長瀬と古菲か」

俺が座る場所を探していると、最初に会ったばかりの俺を助けてくれた長瀬と、その友達である古菲がやって来た。

手には昼食と思わしき物を持っていた。……美味そうだなそれ。

「おい、手に持ってるのは何だ？」

「これでござるか？ 肉まんてござるよ」

「超包子の奴だから、とても美味しいネ」

超包子ってえと、あのかなりの行列が出来ている所か。

その周りに置いてある椅子にも人がいっぱい居る。

余程の人気商品らしいな、そのにくまんと言う食い物は。

近くに寄ってみればかなり良い匂いがする。

今までここで昼食を買わなかったとは……ちよいと不覚だったな。

「ふふ、1つどうでござるか？ 見るからにお腹が空いてる様子でござるし」

「マジか！ 本当に良いのか？」

「構わないでござるよ。ニンニン」

やっぱり長瀬は良い奴だなあ。俺は肉まんを受け取るとすぐに一口食べてみた。

………美味い！ 激美味い！！ ヤバ美味い！！！！

人間ってこんな美味しい物を食べてるのかよ。スゲー羨ましいぞコノヤロー！！

………って俺も今は人間だったな。

すぐに肉まんを食べ終わった俺の感想はただ満足、満足の一言です。

「相変わらずの食べっぷりでござるなあ。剣山殿は」

「前にも言つたろ？　これが俺の食べ方なんだよ」

自身も肉まんを食べながら感心した様に言う長瀬。

戦士として、戦いの時は手短に食事を済ませるのは鉄則だ。

長瀬の横をチラツと見てみると口いっぱい肉まんを頬張っている古菲の姿があつた。

言っちゃ悪いから心の中で留めておくが、かなりの間抜け顔だぞお前。

「うつのわふれたあふが」

「汚えぞ。飲み込んでから喋れ」

そんなに沢山肉まんを頬張るからだよ。

喋るなら飲み込んでからだぞ。そうそう、慌てずにゆっくり飲み込め。

よし、飲み込んだな？　さあ、何が言いたかったんだ？

「言つの忘れたアルが、前回の勝負の決着に私は納得してないネ。今度再戦を申し込むアル」

「あれはお前が勝手に襲撃したんだろうが！！」

古菲が言う『前回の勝負』は正直俺にとって最悪な記憶でしかなかった。

数日前、俺がボーツとして廊下を歩いていると突然古菲が「私と勝負アル！！」と言いながら腹に拳打を叩き込んだのだ。

油断しきっていた俺はその場で昏倒、気が付いた時は保健室のベッドの上だった。

介抱してくれていた保健委員の和泉の話によると、ネギがここまで運んでくれたらしい。

そのすぐ後から聞いた話だが、俺を昏倒させた直後に古菲はその場から慌てて逃げたらしい。物凄く質の悪い通り魔か、己は！！

「そ、それは……剣山がかなりの使い手って聞いたアルから。あれぐらいの奇襲は察知出来ると思ってやってみたアルよ」

何だそりゃ。俺は誰がそんな話をしたのか問いただそう思ったが、犯人はすぐに解った。

さつきから俺と目を合わせようとせず、汗ダラダラで古菲の隣にいる長身の女。

犯人はお前か！ 長瀬！！

「そ、それでは拙者はこれにて失礼するでござるよ」

あっ！？ 逃げやがった！！

おのれ、逃げ足の速い。

「楓、待つアルよ」

楓が逃げ、古菲もその後を追っていった。

だが、追う前にスゲー嫌な事を言い残していきやがった。

「再戦の事、約束したアルよ」

勝手に挑んでおきながら勝手に約束していきやがった。

……まあいい。女だろうが、男だろうが、この剣山が全身全霊を持って叩き潰す。

おっ！ バカやってる間に超包子の行列が少なくなったな。
よし、並ぶとするか。

午後の面倒な授業も終わり、後は寮に帰るだけ。

俺はゆっくり寮に帰ろうと歩いていたが、ある物が目に飛び込んできた。

「あの時の子猫か……」

それは黒い1匹の子猫。屋上で少しだけ遊んでやった子猫だった。誰が見ても「可愛い」と答えるその姿は俺から見ても可愛いと言える。

あれ？ 俺ってこんなに可愛い物好きだったか？ ここに来てから急に可愛い物好きに目覚めたような……気のせいだろうか。

その子猫はジッと見ていた俺の姿に気が付いたのか、俺の方に近づいてきた。

「お前、俺の事覚えてんのか？」

近づいてきた子猫を俺は抱き上げてやると嬉しそうに鳴いた。

屋上で遊んだ時から気になってはいたが、親とか飼い主はいないの
だろうか。

首を見てみると首輪は無い。親が死んでしまったのか、それともこ
んな小さいに捨てられてしまったのか。
どっちにしても1匹ぼっちには変わりはない。

「ダー……そうか。お前は1匹ぼっちなのか」

かなり不憫な奴だな。明日授業サボって飼い主でも探してやろうか。
そんな事を思っていると後ろから誰かが来る気配を感じ、俺は振り向
いた。

「あ……」

「恐山……さん」

見るからにロボットな3-A生徒の絡繰だった。

俺だった事に驚いたのか、絡繰は固まったままだ。

俺が首を傾げていると視線がチヨロチヨロ俺が抱いている子猫に行
っている。

もしかしてお前が飼い主なのか？

「お前の子猫？」

「あ……いいえ、違います。いつもここらにいる猫達にエサをあげ
ているのですが、猫の数が合わなかったので……」

「探してたつてわけか。それで？ コイツはお前の探してた猫なの
か？」

俺の問いに絡繰はコクンと小さく頷いた。
普段教室では無口な奴だが、優しい所あるじゃねえか。

俺は子猫を絡繰に渡した。が、子猫がウルウルした目で俺を見てきた。

おいおい、そんな目で俺を見ないでくれよ……。

「恐山さんに懐いているようですね」

「そうみたいだ。1回屋上で遊んでやっただけだったのに」

ここまであからさまに懐かれては、無下には出来ない。

俺は絡繰に付いて行って、コイツと他の猫達にエサをあげる事にした。

エサをあげ終わると猫達は去っていったが、どうしてもこの黒い子猫だけは離れようとしなない。

絡繰の話によるとこの子猫はダンボールに入れられ、道端に捨てられていたらしい。

その時はかなり弱っていたが、一生懸命に世話したおかげで今の元気な姿があるそうだ。

命を大切にできる心があるなら、ロボットだとしても、絡繰は充分に人間だな。

「ふうん……明日俺がコイツの飼い主を探しに行つてやるかなあ」

俺が吹くと絡繰は心底驚いた様な顔になった。

……俺がこんなことを言うのが、そんなに意外ですか？

「あの……それでしたら私もお手伝いさせて下さい。恐山さんだけにそんな事をさせる訳にはいきませんから」

何だそんな事かよ。まあ手伝ってくれるならかなり助かる。

本来飼い主が見つかって一番喜ぶのは今まで世話をしてきた絡繰の方だからな。

こうして俺と絡繰は明日の放課後に子猫の飼い主を探しに行く事になった。

出会い編：第7話【ペットを飼うつてのは、大変だな】

【SIDE：絡繰茶々丸】

今日の授業が終わり、放課後になりました。

生徒のほとんどが部活に行き、部活をしていない生徒はそのまま寮に帰っていきます。

私はいつも通りマスターと共に、学園長先生が用意してくれたマスター専用の家に帰宅するのですが、今日はちよつと違います。

昨日、恐山さんと子猫を飼ってくれる人を探しに行くと言う約束をしたのです。

「茶々丸、行くぞ」

「あつ………すいませんマスター。今日はちよつと用事が……」

「ん？ 何だ？」

そういえばマスターに昨日の事を伝えるのを忘れていました。

私はすぐに誤り、今日の約束の事を話しました。

するとマスターの顔が徐々に強張っていきました。

どうかしたのでしょうか？ マスター。

「そうか。あいつと………解った」

「あつ………マスター」

そう言うとマスターは教室を出て行きました。

もしかして機嫌を悪くされたのでしょうか……。

「おい、話は終わったのか？」

一応マスターの了解は取りました。話が終わるまで待っていてくれた恐山さんにその事を伝えたと「じゃあ行こうぜ」と言っで、私の手を引きました。

……………まだ教室に残っている人の視線が集中してなんだか気まずいです。

【SIDE：エヴァンジェリン】

茶々丸があいつ、恐山と一緒に子猫の飼い主を探しに行くらしい。じじいから聞いてはいたが、奴からは確かに異様な力を感じた。だが、その異様な力は悪魔でもなく、妖怪等の類でもなく、私と同じ吸血鬼でもない。

「しかしなあ……………」

じじいやタカミチは奴を危険人物ではないと判断した様だが、実際はどうなのだろうか。

私も普段の奴の行動には目を光らせてはいるが、特に怪しい行動は見あたらない。

まあ普段の行動が能天気だし、余計な心配は無用か？

「ふふ。奴とは一度詳しく話してみたいな」

じじいは恐山が自ら話すのを待つと言ったが、私はそれまでは待つほど気が長くはない。

奴からじっくり、ジワジワと訊き出してみたいな、フッフ。

【SIDE：俺】

うつうつ……何か背筋に物凄い寒気がする。

誰かが俺の事を狙ってやがるのか？

「どうかしましたか？ 恐山さん」

「……いいや、何でもないぜ」

子猫を抱きつつ心配そうに俺の顔を見てくる絡繰。

俺の事より、早くコイツを飼ってくれる奴を見つけねえとダメだろ。

「どこから探す？ デタラメに探しても効果的じゃねえだろ」

「そうですね……まず近くにある住宅街から聞いてみてはどうでしょうか？」

タコじじいから貰っておいた地図を絡繰が広げ、言った場所を確認する。

比較的近くにあるもんだなあ、住宅街ってのは。

「すぐに見つかるといいな」

「……そうですね」

【ニャア〜】

〔住人A〕

「1匹ぼっちなんだよ。もし良ければ飼ってやってほしいんだが…

…」

「ゴメンなさい。うちの家にはもう犬がいるのよ」

〔住人B〕

「あの……この子を飼ってはいただけませんか？」

「悪いな。俺、猫アレルギーなんだ」

〔住人C〕

【ニャア〜】

「私、動物嫌いなだよ」

「そうですか……」

結果は惨敗。住宅街をこれでもかと言うぐらいに訪ねてみたが、誰も飼ってくれる人はいなかった。

つたく、心が狭い奴等だ。

アレルギーや動物嫌いなんざ根性で克服しろってんだ。

「気付けば、あつという間に暗くなっちまったな」

「……どうしましょうか」

気が付けばもう夜だ。途中で猫達にエサをやったりした時はまだ明るかったのに。

絡繰が抱いている子猫は腹がいっぱいで疲れたのか分からないが、グッスリ寝ている。

「これ以上動かすのは可哀想だ。諦めようぜ」

「……仕方ないですね」

むむ……絡繰の顔がスゲー落ち込んでる様に見える。

なんか期待に応えられなくて悪い気がするなあ。

……しょうがねえ。昨日考えてた事だが、実行に移すか。

「仕方ない。俺が飼うよ、その子猫」

「ッ！ 良い……のですか？」

「ああ。昨日聞いてみたが、寮に許可取れば良いみたいだ。ネギも動物を飼ってるみたいだし」

俺は昨日の夜に万が一の事を考えて動物を飼って良いか寮に居る連中に聞いておいたのだ。

答えはOK。自分が責任を持って飼えば良いそうだ。

「なんだかんだ言っても俺に一番懐いてるからな。コイツは」

【ニャア〜】

絡繰から子猫を受け取ると子猫は嬉しそうに俺の顔を舐めた。くすぐったいから舐めるのを止める。

「あの……もし良かったら私とマスターの家に来ませんか？ その子猫が普段食べているキャットフードの買い溜めがありますので……」

……

絡繰からの嬉しい申し出だ。俺も動物を飼うのは言わずもがな、初めてだ。

普段猫達と触れ合っている絡繰から、育て方等の方法を色々と聞けるかもしれない。

もちろん俺は絡繰の申し出を受け、家に向かった。

「なんと言うか……珍しい家だな」

「どうぞ、中にお入り下さい」

着いてみるとそこには木で出来た家があった。

巨大台風とか来たら一発で吹き飛ばされそうな気がする。

絡繰に言われて家の中に入ってみると、そこにはしかめっ面のエヴァンジェリンの姿があった。

「ずいぶん遅かったな……って何でお前がここにいるんだ!？」

エヴァンジェリンが俺に向かって指を指した。

何でそんなに不機嫌なんだよ。子猫が怯えるだろうが。

「私が招待しました。子猫にあげるキャットフードを渡そうと思いまして」

「む……そうか。それなら仕方ないな」

俺は絡繰が出してきたキャットフードを受け取り、1日にあげる量等を聞いた。

そして気を付ける事、しつけの事等も一応聞いておいた。

全ては絡繰が本から得た知識らしい。

「ダー、じゃあ俺は帰るわ」

「はい。気をつけてお帰りください」

「ちよつと待て」

目的の物を受け取り、聞いておきたい事も聞いたので俺は寮に帰ろうとしたが、エヴァンジェリンに呼び止められた。何だか不安な笑みを浮かべている。

なんだよ、その笑いは……。

「今度の休み、お前と話したい事がある。用事も何も無い暇な日にしておけよ。茶々丸が呼びに行くからな」

「ヘイヘイ。了解」

「あの……今日は本当にありがとうございました。恐山さん」

俺は絡繰に「おう」と返事を返して家を後にした。

絡繰の顔が若干赤かったな、どっかの回路がオーバーヒートでも起こしたのだろうか。

それにしてもエヴァンジェリンのあの笑み、背筋の寒気の正体はもしかしたらあいつかもしれない。

何かとんでもない約束を取り付けてしまった様な気がするぜ。

「そう言えばコイツにまだ名前を付けてなかったな」

寮に帰った俺は、持ち帰った子猫を毛布の上に優しく寝かせてやった。

さっきまで起きていたが、またすぐに寝むってしまった。

子猫ってのはみんなこうなのか分からないが、可愛い寝顔をしてやる。

「お前の名前は……」

言っておくが、安易な名前じゃない。

くれぐれも誤解すんな。

「ジャガー。お前の名前はジャガーに決めた」

思わぬ同居人が増えたが、悪い気分はしねえ。

せいぜい、俺の家のマスコットとして、元気に育てよ。

出会い編：第8話【俺と同じ奴って……女！？】

【SIDE：俺】

今日は1日休日だ。

タコじいさんから頼まれ事も無く、平和な1日を過ごそうと俺は思った。

だが

「エヴァンジェリンとの約束があっただよなあ」

そう、前にエヴァンジェリンが俺とじっくり話したいからと言う事で、無理矢理約束を取り付けたのである（無論、返事をした俺にも落ち度があるにはあるが……）。

朝食を食べた後、俺は飼い始めた黒猫のジャガーと共に何所かへバツクレようと思った。

しかし、時既に遅し。本人からご丁寧にも、電話が掛かってきやがった。

「逃げるなよ。今日はお前と話したい事があるからな」

家に来て良い時間になったら絡繰が呼びに来るらしい。一方的にそう言つと電話を切ってしまった。

無機な音を鳴らす受話器相手に何回か俺は怒鳴ったが、切れているのだから相手に聞こえる訳がない。俺は諦めて絡繰が呼びに来るまでのんびり部屋で過ごす事にした。

「ッ!？」

1時間ぐらいジャガーとボールで遊んでいた時だった。
突然俺の頭に襲ってきた痛み、俺の体が震えた。
この痛みは……感覚は……。

「間違いねえ…俺と同じ、TFだ」

ジャガーを買っておいた小さな小屋に入れ、俺は部屋を飛び出した。
自分と同じみたいだが、不安定な感じもするこの感覚を頼りに、俺は走った。
寮を出てすぐだったが、俺を呼びに来たのだろう、絡繰の姿があった。

「恐山さん？　どうか、されたのですか？」

「悪い、急いでんだ。話してる暇はねえ！」

絡繰の横を通り、俺は走った。……少し対応が冷たかったか？
だが、今はそんな事を気にしている場合じゃねえ。俺と同じ奴がここに来ているんだ。

感覚を頼りに寮から走っていた俺は、麻帆良学園の方まで来ていた。段々と強くなるこの痛みには俺は内心で確信した。

間違いない……近くにいます。

俺は辺りを歩き回り、正体を探し回った。すると突然痛みが無くなり、感覚が無くなってしまった。

「ちっ、まいったな。……とりあえずもう少し調べてみるか。この近くに居る事は確かなんだし」

俺が辺りを調べ回っていると、変な格好をした5人の男集団に顔見知りが見え、困らされていた。

顔見知りの連中全員は、恐怖に引きつっている表情をしていた。それは、集団の一人が刃物をチラつかせているせいだ。

それを見た俺は当然の如く、助ける事にした。

「おい、何やってんだ？ お前等」

「あっ！ 恐山君！！」

「た、助けてくれる……？」

困らされていたのは、俺のクラスでかなりの仲良しグループである『運動部4人組』だった。

そういえばコイツ等とはあまり話した事がない。話した事と言えば、宿題の事や、初めて俺がクラスに来た時に質問をしてきた程度だ。

「あゝん？ お前誰だよ？」

「彼女達は俺達が今遊びに誘ってんだ。邪魔しないで向こう行け。なっ？」

囲んでいたヤロウ集団の2人が俺の前に来てガンを飛ばしてきやがった。

しかも一人は俺の肩に手を置いてやがる。……ぶっ飛ばすか？ いやいや、まずはサイバトロンの流で解決してみるか。話し合いで。

「そう言う訳にはいかねえ。そいつ等は俺のクラスメイトなんだ。テメエ等が向こう行け」

「ほおゝ……何だとコラァー！！」

肩に手を置いてた奴が肩から手を離れたかと思うといきなり殴りかかってきたが、当然避けた。

向こうから先に手を出してきたので俺は手早く反撃を開始。

殴ってきた奴の手を掴んで、思いきり背負い投げをかましてやった。まず1人。

「て、てめえ……」

「やつちまえー！！」

残りの4人がナイフを取り出して俺を一齐に取り囲んだ。

でもこんな状況を乗りきるのは、修羅場をいくつも乗り越えてきた俺にとって造作も無い事だ。

俺は狙いを定めた1人の懷に素早く入り込んで当て身を喰らわし、

昏倒させた。

これで2人目。

激怒した2人が俺の後ろからナイフで斬りつけてきたが、冷静に対処。

避けた瞬間に肘打ちを鳩尾に叩き込み、倒した。これで一気に4人だ。

「後はお前1人だけど、どうすんだ？」

「ヒ、ヒイ……ば、化け物だ……」

残りの1人がナイフを落とし、腰を抜かして俺から後退っていく。情けねえ姿ぜ、男として恥ずかしくはないのだろうか。

俺は後退っていく奴にゆっくり近づき、胸ぐらを掴んで立たせた。

「コイツ等にまた手を出してみる。その時は、全員容赦なく病院送りにしてやるぞ」

「ヒイー！？！？ すいませんでしたー！？！？」

泣きながら立ち上がり、仲間を捨てて走り去っていく。

俺はあんな男として情けない奴が一番嫌いだ。

みつともなくて、見ていると腹の底からムカついてくる。

「恐山君強いー!!」

「うんうん。全員ナイフを持ってたのに、あっという間に倒しちゃったね」

呆然と見ていた4人組が俺の元に来るなり絶賛。

明石や佐々木なんかはしゃぎまくってるし、和泉と大河内はかなり

感心した様子だった。

「まあ、あんな奴等は雑魚だからな。俺にとっちゃ楽勝……ん？」

4人組が囲まれていた方を見るともう1人、女がいた。

近づいて見てみると髪の毛が白く、目の色は赤、真つ白な服を着ていた。

あのおバカ集団を相手にするのに夢中で、全然気付かなかったな。

「そうそう！ この子がさっきの男達に絡まれててさ。助けようと思ったら私達も絡まれちゃって」

明石がその時の状況を詳しく俺に話してくれた。

改めてこの女をよく見てみると、奇妙な格好をしている。

力も覇気も感じられない。今にでもこの場から消えてしまいそうだぜ。

「おいお前。名前は何て言うんだ？」

俺が代表して名前を聞いてみるが、白い女は困ったような顔を浮かべた。

名前を聞かれるのがそんなにまずいのだろうか？

俺がそう思っていると白い女は、ボソボソと口を開いた。

「……トランス……ミュー……テイト……」

「！？！？」

「えっ？ 今何て言ったの？」

俺はいつにもなく驚いて、その場に固まってしまった。

だって名前からして限りなくTFだし、無くなっていた頭の痛みが、また出てきた。

近くに寄ってみると分かるが、何か物凄く不安定な力だ（無論、俺にしか解らない）。

暴走とかはしないのだろうか？

「恐山君、この子の名前は何て言うの？ 私達聞こえなかったんだけど……」

「あッ！？ え〜と……」

まずい、まずい、まずい……非常にまずい。

どうすればいいんだ俺。今から人間の名前なんて考えつく筈もない。神様、居るのなら、どうか俺に考える時間をください。

いや、ホントに。

「どうしたん？ 顔が真っ青や」

「具合でも悪いの？」

ええ、ある意味具合が悪いです。この状況が俺にとっては具合が悪いです。

トランスミューテイトと名乗ったコイツは未だに俺の事を穴が空くほど見ているし、後ろの四人組も名前を聞きたくてウズウズしてる感じだし……。

とりあえず俺はこの場の状況を何とかするため、最適な行動を取る事にした。

「都合が悪い時は、逃げるに限る！」

「きよ、恐山君！？」

俺はトランス（以下省略）を脇に抱え、その場から逃げた。
こういう状況は慣れてねえ……。

ああ、あいつ等の声が聞こえやがる。
頼むから大人しく俺を撤退させてくれ。

「訳は今度話す！！ すまねえ！！」

「訳って……ちょっと！ 恐山君！！」

くそ……傍から見たら誘拐かもしれねえが、俺はそんなつもりは
ねえぞ！！

この場にコイツを置いていっいたら何かやばくなりそうだからだ！！

「ここまでくれば大丈夫だろ」

どれくらい走ったか解らねえが、俺って今日は走りっぱなしじゃね
え？

脇に抱えたトランスを離し、俺は座りこんだ。その隣にゆっくりと、
トランスが座り込んだ。

「お前もトランスフォーマーだろ？ お前も俺と同じ1回死んだの
か？」

「トランス……フォーマー……死ぬの……痛い」

コイツ、まだ生きてる時にどっかの回路か何かが壊れたのかもしれない。

それとも元からこんな不自由なのだろうか……。

まあ、何にしてもコイツは1回死んだ事に変わりはない。

「ランページ……シルバー……ボルト……友達……私の……友達」
「友達？」

ランページ……か。確か俺が死ぬ前に1回戦った事のあるカニ野郎だ。

シルバーボルトはあのデスマス野郎の事だろう。
じゃあコイツはサイバトロンののかデストロンなのか、分からないな。

「本当にお前は何なんだ？」

「それは私が聞きたいな。じっくりと」

ん？ 今何処からか声が……それもスゲー聞き覚えがあるこの声は……。

俺は漫画よろしく、音が鳴りそうなくらいにゆっくりと首を後ろに振り向いた。

「女を連れ回して良い身分だな。私との約束を忘れて……」
「……………」

ああああああああ……鬼が、エヴァンジェリンと絡繰が居た。
揺らめく巨大な炎をバックに怒っている。

隣の絡繰も無表情だが、何故か怒気を感じさせるのは気のせいだろうか。

「ま、待て。その様子だと微塵も聞いてくれないかもしれんが、俺の話……」

「黙れ」

「はい……」

結局俺は絡繰に引きずられながら連行された。

エヴァンジェリンと絡繰は俺が「痛い痛い！」と叫んでも聞いてくれなかった。

怒ってらっしゃる……2人が怒ってらっしゃる。

ちなみにその後をトランスが必死に付いてきた。
お、俺ってどうなるんだ？

出会い編：第9話【まゝ同居人が増えましたよ？】

【SIDE：俺】

目覚まし時計の音が鳴り、俺は目を覚ました。

時刻は6時、そして未だに鳴り続けている目覚まし時計のスイッチを乱暴に叩いて止めた。

大きな欠伸をかまし、カーテンを開けると雲一つ無い晴天が広がっていた。

俺ってこういう気持ちの良い朝って好きだなあ。

【ニヤア】

「お前も起きたか。待ってる、飯にすっからな」

俺にすり寄ってきた愛猫のジャガーの頭を軽く撫で、俺はキャットフードの缶を開ける。

容器に入れてあげると本当にコイツは美味しそうに食べるのだ。眺めてる俺も釣られて徐々に腹が減ってくる。

「さてと、朝食を作るとするか」

俺は台所に行き、いつもの簡単な朝食を作り始める。

いつもなら1人分で足りるが、今回は深い深い事情があつて朝食を2人分作らねばならない。

その理由は俺の目線の先にあるソファアの上に居る奴だ。

「
　　たたく、気持ちよさそうに寝てやがる。俺の気も知らねえで
よ」

ソファで毛布を被って未だに寝ている少女。俺の部屋に住む事になった新しい同居人だ。

元TFで名はトランスミューテイト。今は人間の姿なので名はミウ（俺が名付け親）。

「タコじじいに色々と事情を話さねえとな」

そもそもこうなったのはさっきも言った深い事情があつての事だ。決して俺はこうなる事を望んでいた訳じゃない。これは誓って本当だ。

昨日俺はエヴァンジェリンと絡繰に無理矢理連行された後、質問と言う名の尋問を受けたのだ。内容は俺から感じる力の正体、ミウの正体、ミウとの関係だった。

もちろん俺はこんな質問に答える気は無いので色々と言いくるめたりして誤魔化した。

この対応にかなりの不満を感じたのか、エヴァンジェリンはかなりご立腹だった。

なんとか宥めようとした俺は「言う事何でも1つだけ聞いてやるよ」と言った。

するとエヴァンジェリンの顔がみるみる笑顔に変わったのは今でも忘れられない。

ああ……何であんな事を俺は言ってしまったのだ？

<回想>

「本当に何でも言う事を聞くのだな？」

「ああ、男に二言はねえ！」

「フッフ……じゃあお前の血を吸わせてもらおうか」

「……………ダー？ 何言ってるんだ？」

「じじいから聞いてなかったのか？ 私は真祖の吸血鬼であり、魔法使いなんだぞ」

「ダー！？ お前がネギと同じ魔法使い！？ 確かに俺のクラスにはネギ以外にも魔法使いがいるって聞いてたが……………そ、それに吸血鬼だなんて初耳だぞ！ じいさんからは何も聞いてないぞ！！」

「ごちゃごちゃうるさい。さて、血を吸わせてもらうぞ」

「ちよつと待て！？ まだ心の準備が……………」

「ええい、ごちゃごちゃとうるさい。茶々丸、押さえろ」

「イエス、マスター。すいません、恐山さん」

「ちょ、待て待て……………ダー！？！？」

<回想終了>

「変な感じだったよなあ。血を吸われるって」

血を吸血鬼に吸われるなんて、生まれて初めての体験だった。エヴァンジェリンは首筋に噛みつきたかった様だが、俺が抵抗したために腕に変更。

噛みつかれた時に少しの痛みが走っただけで後はなんともない。

吸われている時はなんだが蚊に食われているような、注射器で血を吸い取られているような感じに似ていた。

吸い終わった後、エヴァンジェリンが「身体中に力が溢れてくる」とか言って、軽快に動き回ってやがったなあ。そんなに俺の血が美味かったのだろうか？

「それにしても意外だな。あんな怖い奴が、ネギの親父に負けたせいでここにいるなんて」

エヴァンジェリンは昔、ネギの親父に掛けられた呪い……なんつったっけ？

登校……登校……おお、そうだ！！『登校地獄』だ。その呪いのせいで魔力を封じられ、学園の外にも出る事が出来ないので15年間も学園で勉強をさせられているらしい。

15年間も勉強してるだなんて不憫すぎる。俺なら絶対に耐えられそうにない。

それにしてもネギの親父もなかなかエグい事をしゃがるぜ。なんせ、呪いを掛けたまま行方不明になっちまうんだから。

「まあエヴァンジェリンの事をよく知れたのは良かったけどよつ、と」

ここで作っている目玉焼きをフライパンを持ち、空中でひっくり返す。

料理好きのライノックスに付き合わされて自然に覚えてしまったが、結構役に立っている。

目玉焼きを作った後、冷蔵庫から昨日の余りのサラダを出し、白いご飯をお椀によそって朝飯の準備完了。

さてと、ミュウを起こすか。

「おーいミュウ。朝飯出来たから起きろー」

「……………剣山？」

「そうそう俺、剣山だ。早く起きろー」

目を擦りながら起きたミュウはまだ眠そうだ。

俺は頭を軽く叩いてまた寝ないようにし、朝食が出来ているテーブルまで手を引いて誘導。行儀よく席に座らせた。そしてここから、俺の戦いの始まりを告げるゴングが鳴った。

「いいか？ 箸はこう持つんだ」

「こう……………」

「おいおい、人を突き刺す気か？ こうだこう！」

ミュウが俺の部屋に居る理由は……………まあ同じTFだった者同士、かなり不憫な奴と解ったので色々と考えた結果、俺が面倒を見るという事にした訳だ（何故かこの結論にエヴァンジェリンと絡繰は不満そうだった）。

ちなみにその不憫な部分と言うのは色々と重要な知識がスッポリ抜け落ちている事。

もちろん俺が今必死になって教えている『箸の持ち方』も知らないし、『食べ物の食べ方』も知らなかった。

「そつだそつだ。それでその持ち方で食べ物をつんで食べるんだぞ」
「こうやって……………食べる」

「そうそう！ 上手いぞ」

まあ唯一報われる事、それはミュウは物覚えが早いと言う事だ。
重要な知識は物覚えが良いので充分に抜け落ちた所を埋める事が出来るだろう。

それにしても……………これって子育てなのか？

全国の父ちゃん母ちゃん、俺の場合って子育てって言うのでしょうか？

「じゃあ行ってくるからな。ちゃんとジャガーと一緒に留守番してんだぞ」

「……………うん」

とは言ったものの、スゲー心配です。

なんせ一気に同居人が増えたが、性格や年齢的には未熟な奴ばかりだ。

留守番がジャガー（子猫）とミュウ…………不安だ！？

近いうちにミュウ用の服等を買に行かないといけねえし、それと早めに理由を皆に説明しておかないと下手な誤解を招く恐れがある。でもどうやって説明すれば良いんだ？ 物凄く悩む。

「「ケン君おはよう！」「」

「おはようござる」

「よう、お前等か。おはよう」

俺がこれからの事を考えながら寮の出入り口に向かっているとそこにはチビ姉妹と長瀬の姿があった。3人共笑顔で、俺に朝の挨拶をしてくる。

「向かう所は同じ、一緒に行くでござるよ」

「行こうよー」

「行くですー」

そう言つてチビ双子姉妹は何故か俺の肩に乗ってきた。

お前等なあゝ……俺はバッグ持つてんだから横着しないで自分で歩け！！

とまあ、こんな事言つても聞くような奴等じゃないと解っているの
で心の中だけで止めておく。せめて長瀬が何か言ってくればなあ、
こっち見て微笑んでるだけだし。

結局あのチビ双子姉妹は電車乗る時以外は俺の肩に乗っていた。
次からは絶対肩なんかに乗せてやらねえ。

そんなこんなで教室に着いた訳だが……………入りにくい。

登校中には運良く出会わなかったが、教室にはきつと仲良し運動部

4人組が居るだろう。

そしてミュウの事を聞いてくるだろうなあ。正直言っ、どう答えて良いかまったく分からん。

「どうしたでござるか？ 顔色が悪いでござるよ」

「あッ！？ いやいや、何でもねえよ」

「？」

危ねえ危ねえ、長瀬は俺から感じる物を最初に見破った勘の鋭い奴だからな。

でも俺から感じられる力つてのは、長瀬の他にも桜咲、龍宮、エヴァンジェリン、絡繰、タカミチ、学園長と、その手の奴等にはモロバレしているんだけどな。

「ここでウジウジ悩んでいても仕方ねえや。……覚悟決めて入るか」

俺は意を決して教室に入った。

さあさあ、質問でも何でも来い！！

「恐山君おはよ」

「やあ」

「おはようです」

ん？ 意外と普通な朝の風景だ。

運動部四人組の姿もあるが、俺の事を見るなりミュウの事を聞いてくるかと思った。

だが普通に挨拶を交わしただけだ。一体全体どうなってんだ？

「私に感謝するんだな」

「どういう事だ？ エヴァンジェリン」

エヴァンジェリンの話によるとこうだ。

昨日俺が帰った後にタコじいさんの所に行き、事情を話してくれたらしい。

更に許可を取り、ミユウを見た運動部4人組の記憶操作を行ったとの事。

これで俺が寮に帰る時にエヴァンジェリンが最後に訊いてきた「ソイツを見た奴はいるのか？」の意図がようやく理解出来た。

「助かったぜ。朝から質問攻めにされて、朝倉にネタにされるのは御免だからな」

「今回の件の礼は後日請求させてもらうとして、早くクラスの連中が納得出来るような言い訳を考えておくんだな。じじいの方からは責任持つて面倒を見る事、清く正しい同居生活をすれば構わないとの事だ。私はあまり納得してないがな」

何でも俺が責任持てば良いのかじじいよ。色々とツツコミ所が満載だが、今回は本当にエヴァンジェリンに感謝だ。請求する礼の内容が気になるが、そんな事はどうでも良い。

とにかく今は『麻帆良パパラッチ』と恐れられている朝倉にネタにされないだけでも嬉しい（前に猫じゃらしで猫と遊んでいる所を写真に撮られ、クラスの連中にかかわれた）。

「ダー！ 暗い気分が吹っ切れた！！ 今日1日頑張ろう！！！」

なんかもう重荷が取れた気がしてハイテンションだな、俺って。ミユウに関する言い訳も、ちゃんと考えておかなくちゃよ。

「それじゃあここの所を誰かに訳してもらいます」

今やっているのはネギが担当する英語の授業。

相変わらず解りやすい教え方だが、ネギが問題を出すと殆どの奴が視線を逸らす。

視線を逸らさないのは雪広、近衛、宮崎、那波、超、葉加瀬の成績トップクラスぐらいだ。

ちなみに俺の成績は中の下だ。

でもこのくらいの問題は、教科書や参考書をパラパラ読めば結構分かる程度だ。

「それでは宮崎さん、お願いします」

「は、はい」

いちいちネギに呼ばれる度に宮崎は熱暴走したみたいに顔を赤くする。

俺には何故顔が赤くなるのかよく解らん。

「はい、ありがとうございました。次は……？」

突然教室のドアがノックされた。授業中に他の誰かが来るという事は何か起こったのか？

皆がドア付近に一斉に注目する中、ネギがドアを開けた。

「……………」
【ニヤア〜】

コケた、俺はコケた、椅子に座っているにも関わらず盛大にコケた。
コケた俺にクラスの連中の視線が変わって一斉に集まる。
エヴァンジェリンなんか開いた口が塞がらない様子だし、絡繰も多少驚いている様だ。

「あの〜…………どなたでしょうか？」
「…………ミユウ…………剣山…………どこ？」
【ニヤン】

何故にここにいるんだ…………ミユウよ。

出会い編：第10話【妹になりました。……義理だけ】

【SIDE：俺】

今教室全体が静まりかえっている。

なんせいきなり教室に黒い子猫を抱き抱えている、見知らぬ少女が訪ねてきたのだからな。

「剣山……どこ？」

しかも俺の名を言ってるし……。

ああああ……どうして来てんだミュウとジャガー……。

「えっ……あの女の子誰？」

「今、剣山って……」

「恐山君の知り合い？」

うっ……視線が俺に集まってやがる。気まずい、非常に気まずい。

“助けてくれ”の視線をエヴァンジェリンと絡繰の方に送ってみるが……。

「……」

はい、見事に視線を逸らされました。

この薄情者共め。

「えっと、恐山さんのお知り合いですか？」

対応に困ったネギが俺に問いかけてくる。
た、確かに知り合いで一緒の部屋に住んでいますけど……。

「恐山さん？」

今俺の顔は多分冷や汗でダラダラだろう。

いつまでもたつても返事が返ってこない俺にネギが困ったように首を傾げている。

実際どう返事したらいいのか解らずにテンパッていたが、仕方がない。

咄嗟に思いついたこの方法でこの場を乗りきるしかねえ。

「おーっと！ 何だかソイツの顔を急に思い出してきたぞー！！
授業中だが、無性にソイツと話したくなってきたなー！！」

俺は席から立ち上がり、ダッシュでドアの方に向かう。

俺が来た事でミュウとジャガーは眩しい笑顔で迎えてくれた。
だが、冷や汗ダラダラである今の俺にはまったく嬉しくねえ。

「と、言う訳だネギ。少し俺は教室から消えるが、10分ぐらいで戻ってくる。必ずカタを付けてくるからな」

ポカーンとしているネギを無視し、俺はミュウの手を引いて教室から急いで退散する。

退散する際に俺の背中に突き刺さる殺気が混じった視線に、俺はよく耐えたと思う。

「何でお前こんな所に来てんだよ！ 部屋で大人しく留守番してるって言っただろう！」

俺が向かった場所は昼休み行きつけの屋上、そこに着くとさっそくミュウを問いつめた。

ミュウ曰く「俺の後を追ってきた」らしい（ジャガーを連れてきたのは一匹だと寂しそうだから）。

「ったく。よくまあ誰にも気付かれたり、変な奴に絡まれずにここまで来たな」

「ジャガーが……案内してくれた」

あー……そう言えばここら一帯をジャガーと一緒に散歩した事があったっけか。

コイツめ。猫はなかなか頭が良いと言うが、子猫と言えど、侮れねえな。

「しっかしどうすっかなあ。言い訳考えておいて、今日の夜ぐらいに全員集めてミュウの事を言おうと思ったが、この事態は想定外だったな」

そもそも誰もこんな事は予想出来ねえ。予想出来たらエスパーの領域だ。

仕方ねえ。今教室が騒がしいかもしれねえが、言っしかないか。

「ほれ、ミュウ行くぞ。皆にお前の紹介するから」

「紹介……？」

教室に着いてみると予想通り、騒がしい。

この状態じゃあ、授業なんか始まってねえだろうな。

ああ……すまねえネギ。この埋め合わせは必ず、必ずするからな。

「あー……今戻ったぞ」

「ダイノさん……」

悪かった、悪かったぜネギ。だからそんな泣き顔で俺を見ないでくれ。

クラスの大半の連中もそんな冷めた目で俺を見ないでくれ、頼むから。

今からミュウの事を説明するから、な？

「あー、ゴホン。紹介が遅れてすまない。コイツは昨日ここに着いたばかりで、お前等に紹介してる暇が無かったんだ」

「昨日ここに着いたの？」

「ああ」

タコじじいからの口裏で、事情を知ってる奴等以外の連中は、俺のことをちよつと不憫な人だと思ってる（決して変な意味ではない）。

あゝ……このクラスの連中が信じやすい素直な奴等で心底良かった。

連中がミュウの事に注目する中、俺は勇気を出して言った。

「名前はミュウ。俺の……俺の……義理の妹だ！」

「……ハッ？」

やっべー……教室中が静寂に包まれてやがる。ダダスベリか？

明らかに俺の言った事を信じてないご様子の龍宮、桜咲、長瀬、エヴァンジェリン、絡繰の5人は驚いたような、呆れたような目で俺を見続けている。

俺もあえてその目から視線を逸らす。

あのまま受け続けていたら、視線だけで俺は恥ずかしくて死んでしまいそうだ。

「か……」

「か？」

「……かわいいー！！」「」「」

突然の一言で静寂に包まれていた教室が再び騒がしいクラスに返り咲いた。

ミュウが押し寄せる奴らにもみくちゃにされている。

「コラコラコラコラ！ やめーい！！ ミュウが苦しがつてるだろーが……！」

俺はミュウを集団から引つ張り出してやった。

ネギもそれを見かね、連中を落ち着かせて席に座らせてくれた。そしてお決まりの質問タイムが始まりそうになったのだが、俺がそれを抑えた。

「悪いけど、質問とかは勘弁してくれねえかな？ コイツ、喋るのが苦手なんだ」

「えー！ 残念」

「くー！ 久しぶりに良いネタが入ったと思ったのに……義理の妹か。それに質問拒否とはねえ、ガードが固い」

はは、お前だけには絶対教えんぞ朝倉。
良いネタにされてたまるか。

「あの〜ミユウさんもここに居て良いです。良いですから、授業の方を続けさせてください……」

「あつ……悪い」

ネギが授業を再開させようとした時、運悪くチャイムが鳴った。
授業が進まなくて落ち込んでいるネギを、保護者である神楽坂と近衛が慰めている。
すまない、本当にすまないネギ。

昼休みになってもミユウとジャガーは相変わらず連中に囲まれている。

見ると、昼食と一緒に食べている様だ。

そんで俺と言えば……。

「まったく……咄嗟に考えついたのは“義理の妹”か。もう少しマシな考えが思い浮かばなかったのかお前は」

「しょ、しょうがねえだろ。咄嗟に考え付いたのがそれだったんだよ」

「威張れる事でもないと思います」

冷たい視線の女達に囲まれていた。

うつ……最近絡繰のツツコミが妙に冷たい気がするぜ。

長瀬、龍宮、桜咲の3人は俺が必死に事情を説明してなんとか納得してくれた。

「それで学園長は何と？」

「俺が責任持つて面倒見れば一緒に暮らしても良いそうだ」

「やれやれ、学園長殿らしいでござるな」

「まったくだな」

学園長の対応に長瀬達は呆れ顔だ。

それにしても俺にはドンドンと新しいプロフィールが付くなあ。

元TFで、不憫な人で、黒猫を飼ってて、義理の妹がいて……キリがねえ。

「しょうがない、じじいには私から話しておいてやる。ミュウは恐山の義理の妹だと言う事にしておけ、とな」

「何から何まで本当にすまねえ」

「ふん。ちなみに言うておくが、この件も前の礼に上乘せしておくからな」

「いやいやそれが目的かい！？」

くそつ、エヴァンジェリンにカリがどんどん増えていくなあ。

請求される礼がスゲー気になるぜ。

ミユウには勝手に家を出ちゃいけないとよく言い聞かせておこう。
それとジャガーにも余計な案内はするなと耳にタコが出来るくらい
言い聞かせなくちゃな。

出会い編：第11話「旅行の準備だ。これも面倒だけど」

【SIDE：俺】

チャイムが学園に鳴り響き、放課後のHRの時間を報せる。
ネギが教壇に立っていつもの感じでHRが始まると思った。

のだが、今日は何だか様子が違う。ネギの機嫌がかなり良いのだ。
だ。

あいつ、何か良い事でもあったのか？

「えーと皆さん。来週から僕達3・Aは、京都・奈良へ修学旅行に行くそうで」

なるほど、修学旅行の事で機嫌が良いのか。

確かにあいつは修学旅行の話になると途端にテンションが高くなつたな。

こちら辺の行動は、まだそこらに居る普通の子供と変わらなくて笑えるぜ。

「もー準備は済みましたかー!？」

「「「「はい!」「」「」」」

ネギ以外にもテンション高い奴が大勢いるな。

対して綾瀬や長谷川の冷静な奴等は溜め息ついて呆れている。

まあ、その気持ちも分からなくもない。

「ネギ先生。学園長が呼びですよ」

「あつ！ はい」

一時の間、チビ双子姉妹と騒がしくしていたネギは学園長に呼ばれて教室を出て行った。

あのタコじじい、また厄介な頼み事をしそうな気がするな。ネギも不幸なこった。

「さてと、修学旅行か。色々と準備しなくちゃいけねえな」

ついでに色々と忙しくて先延ばしにしていたミユウの服も旅行準備の時に買ってやるか。

だがしかし困った事に……俺に女の服の善し悪しが分からない。分かる訳がない。

女の服を選ぶのに、男のセンスが必要とも思えない。

「それに女の服売り場に、男の俺は行きにくいしなあ……誰かに付き合ってもらうか」

「……と言う訳なんだ。お前等に付いてって良いか？」

「うん。私は別に構わないよ。アキラは？」

「うん。私も構わないけど……」

俺が頼んだのは運動部仲良し4人組の中の2人、明石と大河内だ。ちょうど今から準備の為の買い物をして行く所を便乗させてもらっ

ただ。

あとの2人の和泉と佐々木は先に買いに行っているらしく、後で合流するらしい。

「買いに行くのは良いけど、ミュウちゃんの服の趣味とかは分かるの？」

「あつ……………聞いた事ねえ」

はあ……………『修学旅行セール!!』と大きく書いてあつて物凄く目立つ店だな。

中に入ってみると生徒がかなり居て服をそれぞれ品定めしている。色々あつてどれを選んだら良いかよく分らん。

その大人数がひしめく中、先行した明石と大河内が選んだ服を持ってきて俺に見せる。

「これなんかどう？ ミュウちゃん白が好きそうだし」

「子猫を連れてたから、猫が好きなのかと思って選んでみたんだけど……………」

明石はとにかく白い服、大河内は猫のイラストが描いてある服を持ってきた。

頭の中でこれを着たミュウを想像してみるが……………どうだろう？ 似合うだろうか？

やっぱり服の善し悪しは分からない。

って、これじゃあ二人に付いてきた意味が無いじゃねえか!?

まあ、とりあえず俺はその2着を採用し、サイズを探して購入した。採用されて喜んでいた2人に俺は適当に選んだ事に申し訳ない気が物凄くした。

今思えばミュウって身長は綾瀬と同じくらいなんだよなあ。サイズは意外と探しやすかったな。

場所は変わって、派手な飾りがいっぱいある違う店。

俺、明石、大河内の3人は服を探しに来た訳だが、ここも生徒がいっぱいだ。

「どこもかしこも、生徒だらけで暑苦しいぜ」

「どうしよっか。この人混みじゃはぐれちゃうかも」

確かに。この人混みの中じゃ一緒に行動していてもたちまちはぐれてしまうな。

仕方ない、ここは背の高い俺が先導するか。

「行きたい箇所とかあるのか？ あれば俺が引っ張って行ってやるが」

「えっ？ 流石にそれは大変じゃない？」

「これぐらい手伝わなくちゃ男としての面子が立たないんだよ。お前等ばかりに世話になる訳にはいかねえしな」

明石が「じゃあお願いしちゃおっかな？」と俺に行き先を言った。丁度正面の辺りか。

人混みも少ないし、突破はしやすいかもしれないな。

「ほら。手を離すなよ」

「う、うん」

「あつ……」

明石と大河内の手を掴み、俺はワザと目を鋭くし、一気に正面突破を開始する。

周りの奴等も俺の迫力に負けて、次々と道を空けていく。そうだそうだ、散れ散れ。

そして出発してから10秒も経たない内に目的に到着した。

「すごい。あつという間に着いちゃった」

「何と言つかむしろ、無理矢理道を開いたような気がするね」

ハッハッハ、それを言うな大河内。

でもああしなきゃ、人間ってのは道は開けねえよ。

そして色々と物色し、良い服を見つけた明石はすぐに購入。対する大河内は気に入った服は無かったようだ。

「大河内は行きたい箇所はあるのか？」

「私はここを見てみたいんだけど……恐山君は大丈夫？」

「場所によるが、変な心配はいらねえよ」

ここから結構先の所だな。生徒もかなりいて突破するのはかなり難しそうだな。

俺と大河内が壁にある店の見取り図でルートを確認していると、突然明石のバッグから賑やかな音が鳴り始めた。

「もしもし……うん、うん、解った」

あれが“けーたいでんわ”か。実際には初めてみるな。無線機にも似てる様な気がするぜ。

連絡によると、和泉と佐々木が店の外の近くにあるカフェで待っているらしい。

ここからは多人数で進むには難しいため、先に明石を2人が待っているカフェに行かせた。

この方が下手に迷子が出ないから、大河内1人に集中出来る。

「じゃあ行くぞ。俺の手を離さずにしっかり掴まってる」

「う、うん……」

一気に駆け出し、突破を試みる俺と大河内。途中つまずきそうになったり、大河内と手が離れそうになるハプニングがあったが、無事に着く事が出来た。

「ふう……何とか着いたか」

「さつきはあ、ありがとう……。つまずきそうになったのを支えてくれて……」

「あれくらい当然だ。連れてく奴は、安全に導かないといけないしな」

それから大河内は気に入った服があったようで、それを購入。連れてきてくれたお礼にと、俺の服も大河内が選んでくれた。選んでくれたのは恐竜の絵がプリントされた服だ。

やっぱり女つてのはセンスが良い。真ん中に描かれている恐竜のイラストが良いな。

無事に買い物済ませた俺と大河内は、3人が待っているカフェへ向かった。

「アキラ、恐山くん、こっちこっち」

カフェに着くと明石が手を振って場所を報せてくれた。そこに行き、用意してくれた椅子に俺と大河内が座る。あゝ疲れたぜ、準備って大変なんだな。

椅子にもたれ掛かっていた俺の前に、和泉がメニューを差し出してくれた。

「どうやら何か奢ってくれるらしい。」

「恐山君は何を飲む？」

「……何でもいい。とにかく水分を補給したい」

「分かった。アキラはどうする？」

「私は……アップルジュースにする」

「分かった。それじゃあ、恐山君も同じのを頼むな」

注文を受けたウェイトレスが、5分ぐらい経ったあとにアップルジュースを持ってきた。

喉がとにかく渴いていた俺は、用意されたストローなんか使わずに一気に飲み干した。

「豪快やね。恐山君」

「喉が渴いてるからゆっくり飲めねえんだよ」

「そんな事したらむせちゃうよ。ゴホゴホって」

「そんなにヤワな喉じゃねえよ」

「いや、喉とかの問題じゃないと思うよ……」

優しい感じのする笑い声が響く。

コイツ等とはあまり話した事が無かったし、交流を深める良い機会かもしれない。

コイツ等って、根は明るい奴等ばかりだしな。

「そう言えばさ、恐山君の頬の傷って、何か由縁があるの？」

「ん？ この傷か？」

「うんうん。最初見た時はさ、ヤクザ関係の人かと思っちゃったもん」

「お前……俺をどう言う目で見てんだよ」

邪気がまったくくない目で質問をぶつけてくる佐々木に、俺は呆れたような気持ちになる。

するとさっきの佐々木の質問を悪いと思ったのか、和泉と大河内が佐々木を叱った。

明石は……ただ興味があるような視線をくれているが。

「まあ良いや、教えてやる」

「恐山君、無理せんでええよ。まき絵のきまぐれな質問やし」

「別に無理はしてねえよ。この傷はな……俺の尊敬する、ある男が付けたモンなんだ」

尊敬する男とは無論、コンボイのことだ。

コンボイの名は伏せて、運動部4人組に、対決の時のことを話してやった。

俺の話を聞く4人の色々な反応が、以外に面白かった。

「へ……恐山君、その人のことが本当に好きなんだね」

「好きとかつてのは分からねえけど、今でも尊敬してるってことは確かだな」

「戦いのあとに出来た信頼関係か……漫画みたいな話だね」

「言っておくが、嘘じゃねえぞ」

それから俺達は他愛もない会話を続けた。

気が付くと、周りはあるという間に暗くなっていた。

今更ながら、時間が経つにつて早い気がする。

「そろそろ帰ろっか？」

「うん！ そだね」

久しぶりに沢山話した気がする。改めて思うが、こういうのも悪くねえ。

記憶操作がしてあってコイツ等には記憶が無いが、また前のようなおバカ集団に絡まれる危険性があるからな。

同じ寮に住んで、今回は色々世話になったからな。最後まで送って行ってやるか。

俺が前を歩き、近寄って来る男共に睨みをきかせて寮へ向かう。
その結果、1回も絡まれることなく、無事に寮に着く事が出来た。
面倒なことが無くて、助かったぜ。

寮に入ったあと、俺達はお互いの部屋があるところで別れた。
だが俺は、別れる前に服を選んでくれた大河内にお礼を言っておいた。

「服選んでくれてありがとな。個人的には気に入ったぜ、コレ」
「ど、どういたしまして」

ミュウに負けず劣らずの笑顔だな、大河内の奴。
まあ、お礼を言われて嬉しくない奴はいないだろう。

「修学旅行、ぼちぼち楽しもうぜ」
「うん！」

俺と大河内は手を振って別れた。普段の表情からは想像もつかねえな。

さて、ミュウはこの服を気に入ってくれるかな？
ジャガーにもエサをあげないといけないし、早く帰ってやらないとな。

修学旅行編：第12話【初っ端から、こんなんですか？】

【SIDE：俺】

待ちに待った修学旅行当日。

俺はミュウとジャガーを連れてじじいの所に向かった。

こんな朝っぱらから何の用があるんだか知らないが、用件は早く済ませてほしい。

「ういゝっす……」

「おはよう剣山君。突然呼び出してすまないのお」

「あんだよ。急に呼び出しやがって……」

つたく、前おきの挨拶は良いから、用件を早く言ってくれ。

俺は、朝の5時に起きて朝食作りと荷物の確認とかして眠いんだから。

それに……集合場所に向かう前に、ミュウとジャガーをエヴウンジエリンの家に預けなくちゃならねえんだから。

「うむ。君にワシの孫娘であるこのかの護衛を頼みたいのじゃ」

「ハッ？ 近衛の護衛？」

また唐突に、とんでもない事を言い出すな、このじじいは。

何で近衛に護衛がなんかが必要になるんだ？ 自分が溺愛してるからか？

「何で護衛が必要なんだ？ 誰かに狙われたりとかしてんのか？」

「理由は話すと長くなるんじゃないが、聞いてくれるかの？」

「あゝ……なるべく短くまとめてくれると助かるぜ」

じいさんの話によれば近衛は凄まじい魔力を秘めた魔法使いなのだが、親の方針からか普通の女の子として生活してもらいたいと言う思いがあり、今まで秘密にしていたのだと言う。

しかし、近衛が麻帆良学園に通っているのを快く思っていない京都にある『関西呪術協会』なる物がこちらにイヤガラセをしてくると考えられる為、それから守って欲しいのだという。理由はこつちの『関東魔法協会』（治めているのはじいさん）と向こうの関西呪術協会の仲が悪いから、らしい。

「ガキのケンカかよ。もうちつと仲良く出来ねえもんかね？」

「それは大丈夫じゃよ。ネギ君に仲直りする為の新書を渡してある。前に頼んでおいたのじゃ」

なるほど、前にネギを呼んだのはその為か。

しかし、わざわざ敵の本拠地に乗り込むって事は結構な危険が伴うんじゃないか？

そこら辺は考えてんのか？ このじじいは。

「まあ、頼まれたからにはそれなりの仕事はするぜ。こういう時のために、一応サーベルを常時携帯してんだからな」

「迷惑を掛けるのお。それと護衛には刹那君も一緒に、協力して励んでくれ」

へえゝ桜咲も護衛をやってんのか。
初めてそんな事知ったぜ。

……いけね！ もうすぐ集合時間じゃねえか。
早く行かなきゃクラスの連中に文句言われちまう。

「時間が迫ってるから、そろそろ俺は行くぜ。それに、コイツ等を
エヴァンジェリンの所に届けなくちゃいけねえし」
「その必要は無い。こっちから来てやったぞ」

急いで部屋から出ようとしていた俺を止めたのは、エヴァンジェリ
ンと絡繰だった。
ミュウとジャガーを受け渡す時間にだいぶ遅れちまったからな。向
こうから来てくれた。

「まったく。貴様と言う奴は、約束の1つも守れんらしいな」

「そうカリカリ怒るなよ。ミュウとジャガーの事、よろしく頼むぜ」

ミュウとジャガーを引き渡し、俺は集合場所である大宮駅へ向かお
うとした。

のだが、ミュウが俺の服を掴んで離さない。行かせたくないら
しい。

「昨日も言っただろ？ 俺は修学旅行で、暫くお前とは一緒に居ら
れないんだ。修学旅行が終わったら1番に帰ってきてやるから、な
？ だから手を離してくれよ」

「……………」

ミュウはまだ納得していなそうな顔だったが、ゆっくりと頷いて手
を離してくれた。

今思えば、こんな顔をしたコイツって初めて見る。

「お土産も買ってきてやるよ。もちろん、エヴァンジェリンと絡繰の2人にもな」

「期待しています。恐山さん」

「当たり前だ。忘れたら許さんぞ」

「怖え怖え。そんじゃあ、行ってくるぜ」

『登校地獄』の呪いのせいで修学旅行に行けないアイツの分も楽しんできてやるか。

それと写真も撮ってきてやろう。エヴァンジェリンの他に、ミユウが喜ぶかもしれない。

ギリギリだったが、無事に大宮駅に到着。

どうやら残りは俺1人だったらしく、クラスの連中から「遅いよ」とか「寝坊した?」とか「その大きな荷物何?」とか聞かれたが、ノーコメントを通した。

でも携帯しているサーベルは布で隠しているとはいえ、流石に目立ってしまう。

こういうのを、場から浮いていると言っのだろうか。

「では1班から6班の班長さん、お願いしまーす」

ネギはやはりテンションが高い。あいつが一番この旅行を楽しみにしていたからな。

でも今回はあいつにとって大変な仕事でもあるんだよな。

ちなみに俺の所属班は6班で、班長は桜咲だ。

「おい、俺達つて3人だけだが、どうするんだ？ 規定の人数じゃねえぞ」

「……………」

「そうですね……………私がネギ先生に聞いてきますよ」

流石桜咲班長、仕事が速くて助かります。

それからネギの提案で、人数が少ない俺達は何処かの班に加えてもらう事になった。

ザジは3班、俺は4班、桜咲は5班になった。

偶然かもしれないが、良い組み合わせをネギはしてくれた。

近衛がいる班に、護衛役の桜咲がいれば、敵も迂闊には手出しは出来ないだろう。

「せつちゃん。一緒の班やね」

「あつ……………すいません。失礼します」

「せ、せつちゃん……………」

何だ？ 桜咲の奴、逃げる様に向こうに行っちまった。

随分と冷たい態度だが、桜咲って近衛の事嫌いなのか？

でも嫌いだったら護衛なんかやる筈がない。……………訳ありか？

なんか気になる事が山ほどあるが、4班の奴等がいる席に行くか。

「……………」

「お？ どうしたザジ」

俺が席に行こうとしたらザジが服を掴んできた。

ミユウと生活し始めてからと言うもの、口数の少ない奴の言いたい事が分かるようになってきた気がする。

ザジだってよく見ていれば、微かに表情や唇が動くから、何を言いたいかわかる。

「……………」

「俺と一緒に行動したかった？　しょうがねえだろ、班の人数が足りないんだから」

「……………」

「分かった分かった。自由行動の時間に暇があったら一緒に行動しようぜ」

「……………」

「そんなに嬉しいがる事か？　……所でお前等、見せモンじゃねえぞ」

周りの奴等がスゲー目で俺を見ている。

そりゃそうだ、傍から見れば一方的に俺が会話してるようなもの。

無理だと思うが、ザジにはもっと喋ってもらって表情豊かな奴になつてほしい。

でなけりゃこれからお互い会話がしづらい（ザジの方はそうでもなさそうだけど）。

「ふあゝ…………朝早く起きたから眠いなあ」

4班が座っている席に向かった俺は座るなり口を開け、大きな欠伸をした。

いつもなら6時に起きてパツと朝食を作るんだが、今日は修学旅行だからな。

荷物の最終確認とかあって、とにかく面倒だった。

なんか1回眠らないと、欠伸が何回でも出そうな気がする。

「眠いなら寝ると良い。時間を言ってくれば、私が起こしてあげるよ」

「悪いな龍宮。それじゃあ……1時間経ったら起こしてくれ」

起こしてくれるという龍宮に時間を言い、襲い来る睡魔に身を任す。この分ならずすぐに眠れそうな気がする。

そんな気がしたんだが。

「おい……そんなにジーツと見られてると寝にくい」

「えゝ！ だってダイノ君の寝顔見るのって初めてなんだもん」

「普段仏頂面だしね。眠ってる表情はレアだよ」

「テメエ朝倉！ 仏頂面とか言うな！」

大量の視線を感じて周囲を見渡してみると、横の席の奴とか前の席の奴が、穴が開くくらい俺を見ていた。中にはカメラを持ってる奴までいる。

俺の寝顔なんか撮ってどうすると言っのか……。

しかも右隣の長瀬に至っては食い入るように見ている。何だか頭痛がしてきた……。

俺は鬱陶しいギャラリーを散らすと、再び睡魔に身を任した。
頼むから、電車の中くらいゆっくり寝させてくれ……。

「……………うるせえ」

せっかく寝付いたと思ったのに周りがスゲー騒がしい。
龍宮がまだ起こしてくれてないという事は1時間経ってないんだよな。

まったく、しょうがない連中だ。少しの間静かに出来ないのか。

【ゲコツ】

「あつ？」

なんか俺の顔の上に載ってきたぞ。

何だこりや……カエルじゃねえか。

ん？ 何で電車の中にカエルが居るんだ？

「うおっ！？ なんだコリヤー！！」

見てみると大量のカエルが車内を跳び回っていた。ゲコゲコ鳴き声がやかましい。

この異常事態に生徒がパニックになっており、中には気絶してる奴もいる。

誰だよ、こんな大量のカエルを持ち出したのは！

「ネギ！ どうしたんだよコレは」

「ぼ、ぼ、僕にも分かりません」

「そんな事より、アンタも手伝ってよ！！」

神楽坂に言われ、しぶしぶ俺はカエル集めを手伝った。
表面がヌルヌルしてて掴みにくいぜ、カエルってのは。

それから何分かってカエル全てを回収成功、総数は100と8匹。
かなりの数が居たもんだな。

「あゝったく！ お前もちつとは手伝えよ、龍宮」

「こういう楽な仕事は剣山に任せるよ。私が出る幕じゃない」

「ちっ！ 調子の良い事を言いやがって」

まったく、手伝う気は0かよ。それに出る幕って何だよ、出る幕
て。

ん？ 隣の長瀬の様子がおかしい。顔を真っ青にしてブルブル震え
ている。

「どうした？ 長瀬」

「せ、せ、せ、拙者は……カ、カ、カ、カエルがダメなんでござる
よ……」

意外だ。スゲー意外だ。長瀬の弱点がカエルだったとは……コイツ
も女って事か。

しかしこの大量のカエル、もしかしたら関西呪術協会のイヤガラ
セなのか？

だとしたら物凄く下らない。

でもこのまま小さいイヤガラセを受け続けていたら流石に修学旅行
が台無しになるな。

この先の道中が心配で堪らんぜ。

修学旅行編：第13話【トラブル、トラブル、またトラブル！？】

【SIDE：俺】

車内で一騒動あったが、無事に京都・奈良に到着。
最初の見学場所である清水寺に、俺達は向かった。

こんなところに来るのは初めてだが、景色が良いな。
それに空気も美味しい。

「ここが清水寺の本堂、いわゆる『清水の舞台』ですね」

「『清水の舞台』？」

「はい。本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらう為の装置
であり……」

綾瀬がヤケに詳しい。なにげにこういう場所が大好きなのか？
それにかなりマニアックな感じがするのは気のせいか？

それにしても、俺って小難しい説明は苦手だ。
立ってるのに、何だか眠気が襲ってくる。

「夕映は神社仏閣仏像マニアだからね」

マニアだったのか、綾瀬。

だからそんなに詳しいのも納得出来る。

「うわー……京の街が一望出来ますね」

「あんまりはしゃぐと、そこから落っこちるぞネギ」

「はい！」と元気よく返事するネギ。

本当に楽しみにしてたのは解るが、お前が見せる笑顔に、鼻血を出す雪広なんかすぐに犯罪に走りそうだぞ。

「ん？ あいつ……あんな隅から見てやがるのか」

柱の一角に目をやるとそこには桜咲が居た。

あいつの目線の先にはもちろん近衛の姿がある。

だが、あんなに遠くに居なくても良いんじゃないかと、俺は思う。

むしろ側に居てやって、護衛と街中の見学の両方をすれば良いのに。

「しょうがねえな……」

小さい溜め息をつき、俺は桜咲の元に向かう。

桜咲の視線が俺に移動し、警戒心を醸し出す顔になった。

別にお前を取って食ったりはしないってのによ。

「……何かご用ですか？」

「何でそんな隅から見てんだ？ 護衛すんならもつと側にいてやれば良いじゃねえか」

俺がそう言った途端、桜咲の顔が驚きの表情に変わった。

もしかしてコイツは俺も近衛の護衛に付いている事を知らないのか？

「な、何故その事を知っているのですか！？」

どうやら本当に聞いていないらしい。

じじいめ、情報伝達はもつと早めにしておけ。

味方同士なら尚更だ。

「じじいから頼まれたんだ。お前と協力して近衛の護衛をしてくれ、
つてな」

「……………そうですか」

コイツってどことなく境界線みたいなのを引いて距離を取ってる様な気がする。

今回だけじゃ無く、仕事をたまに一緒にやる時もそうだ。

龍宮とも長くコンビを組んでる様だが、教室で他の奴等との日常の会話なんか聞いた事が無い。するとすれば、仕事仲間との、今後の仕事話だけだ。

「まあ何だ、ともかく側にいてやれ。近くにいた方がなにかと良いぞ」

「余計な気遣いです。私は私のやり方で護衛します」

けっ、随分な言い方だぜ。

でもお嬢様って…………近衛の事か？

珍しい呼び方をするもんだな、コイツって。

「余計な気遣いか。じゃあ訊くが、何で近衛に冷たいんだ？ 近衛の事嫌いなのか？」

「！！？ そんな事ありません！！ 私は…私は…」

凄い勢いで否定した。表情も何所か悲しげだ。

こりゃあ…………相当深い根がありそうだ。

まあ、嫌々やっている訳ではないと分かっただけでも収穫物か。

「そうか。嫌いな訳じゃないんだな。そうじゃあ、仕事仲間として1つ言っておくぜ」

「……何ですか？」

「電車の中でな、悲しそうだったぞ。あいつ」

「ッ！？」

「護衛するべき奴を、護衛する奴が悲しませてたら、世話ねえよな」

最後にそう言った俺は、桜咲の前から別の場所に移動した。ちよつと余計でキツイ事を言ってしまっただろうか。

初っぱなから仲間との関係を悪くしてどうするんだよ俺！

だが、あいつの態度はなんとなく気に入らねえから、とりあえず言ってみた。

しっかしどうして、俺はこんなお節介な性格になっちまったんだ？
どっかの誰かさんの性格が移ったか？

「恐山、何をしてるんだ？」

「ほえ…何だ、龍宮か」

考え事をしている時に不意に声を掛けてきた龍宮に俺は変な声で返事をしてしまった。

その事に龍宮が首を傾げているが、気にするなと言っておいた。

「これから地主神社に移動するらしい。そんな所でボーツとしてると、置いてけぼりを喰らうよ」

それはまずいな。

こんな初めて来た所に置いてけぼりを喰らってしまったら絶対にヤバイ。

と言うか、ネギや一部の生徒が影も形も無く消えてやがる。

1分ぐらいあいつ等はジツとしてられないのだろうか。

更に言えば、隅に居た桜咲もいつの間にか消えている。
全てにおいて遅れを取ってるな、俺って。

「じゃあ一緒に行こうぜ。4班も俺とお前しかいないみたいだし」
「そのつもりだよ。だから呼びに来たんじゃないか」
「そりゆどうも……」

へえ……龍宮もこんな笑顔を見せるんだな。
いつも教室や仕事では冷静な表情しか見た事がない。
長瀬、龍宮と、今日はいつもと感じが違う奴をよく見る。
こういうのも修学旅行の楽しみなのだろうか。

「むむっ!! なんか恐山君の辺りから甘酸っぱいラブ臭が!!」
「何アホな事言ってるですか、ハルナ」

何か頭が痛え……早乙女が何か得体の知れない臭いを嗅ぎとってる。
よく見ると、何故か龍宮の頬がほんのり赤い。なんなんだ。

俺と龍宮が神社に着いてみると雪広、佐々木、宮崎が目を見りながら歩いていていた。

何だ? また何かの新しい遊びか?

「あいつらは何をやってんだ?」

「ああ。あれは『恋占いの石』って言うてね、目を瞑って、私達の

近くにある石から向こう側にある石にたどり着くと、恋が成就するらしいよ」

パンフレットを見ながら龍宮が丁寧に説明してくれた。

まあ、要するに、俺にとっては全然興味が無い物って事だ。

「まあ成就する様になん……あつ！」

三人の行く末を見守っていると前をリードしていた雪広と佐々木が突然悲鳴と共に消えた。

現場に急ぐと二人は落とし穴に落ちており、その中にはまたカエルの御一行が居た。

何で関西呪術協会の奴等はカエルを推すんだ？

もの凄いカエル好きがいるのか？ どっちにしても、物凄くうんざりしてくる。

「恐山さん！　そこで眺めてないで助けてください。クラスメイトが困っていますのよ！」

「ちっ！　それが人に助けてもらう態度かっつの」

ネギと神楽坂を手伝い、落ちた2人を助ける事に成功。

落ちていない宮崎はいつの間にかゴールしていたりする。

もしかしてあいつが隠れた強者なのか？

気を取り直し、場所は変わって音羽の滝。

そこに流れる3筋の水はそれぞれ健康・学業・縁結びとなっており、飲むと成就するらしい（龍宮談）。

「……か左に人数が行きすぎだろ！　後ろに並ぶ人が迷惑してんじやねえか！」

しかも横に居た筈の龍宮もいつの間にか列に混じってるし。

「……たたく……何であんなのに夢中になれるのかね」

「恐山さんは行かないんですか？」

「悪いが、興味は0。ナッシングだ」

「そうですか？　音羽の滝の他に、楽しい物は沢山ありますよ。たとえば……おみくじとか」

おみくじねえ……ネギもまだ子供だし、そういう物を信じる年頃なんでしょうな。

ん？　何か滝に行ってる連中の様子を変だぞ。

「おいネギ。あれって何か変じゃねえか？」

「えっ？」

俺とネギが、様子がおかしい滝の方に行ってみると、そこにはバタバタと倒れている連中が居た。なんだか顔がほんのり赤く、心なしか、酒臭え。

「……何かみんな、酔いつぶれてしまったようなのです」

「ええーっ！！」

驚いたネギが滝が流れている建物の屋根を調べてみると、大きな酒樽を2個発見。

このせこい手口は関西呪術協会のイヤガラセだな、絶対に。
ちくしょう……これだけみみっちいイヤガラセが続くといい加減頭
に来るなあ。

犯行に及んでいる所を見つけたら真っ先にぶん殴ってやりてえ。

「何で修学旅行に来て、酔っぱらった連中の世話をしなくちゃいけ
ねえんだよ……」

酔っていない生徒総動員で酔った生徒を運び、近くの茶店の椅子に
座らせて酔いを覚ます。

関西呪術協会の奴等め……面倒な事をしてくれたよ。

「きょくやまくん！」

「どわっ！？ 大河内かつ！……ぐほっ！ 酒臭い！」

介抱していた俺の後ろから、突然顔を真っ赤にした大河内が抱きつ
いてきた。

こ、コイツも飲んで酔ってたのかよ！？ な、何か意外だ。

「ウフフフ……きょくやまくん」

「分かった、分かった、分かったから大河内。頼むから抱きつくの
をやめろ、その怪しい笑みをやめてください……」

「いっやだ」

質の悪いそこら辺のガキがお前は！！

しかしどうすればいいこの状況。

後ろから大河内が俺の首に手を回して抱きついてるし、時々吐く息

がもの凄く酒臭い。

このまま吸い続けていたら俺……いつか吐く。絶対に吐く。

「剣山殿……」

「恐山……」

うつ！？ 長瀬と龍宮が俺の目の前にいる。しかも二人の目が……
虚ろだ。

大河内と同じく顔がほんのり赤く、酒臭い。

あー……何か展開が読めてきましたよ。

「アキラ殿……抜け駆けはダメでござるよ」

「そういうお前もだぞ、楓。きょーやま……」

「お前等やめろーッ！！！」

ネギと神楽坂が新田と瀬流彦を何とか今起こっている事態を誤魔化している間、俺は3人に襲われた。

が、スキを突いて気絶させる事に成功し、事なきを得た。

心配でやった来たしずなも誤魔化し、酔った連中とそうでない連中をバスに押し込んで強制的に旅館に向かう事となった。

「ちくしょう……初日からこんな騒動ばかりかよ。先が思いやられるぜ」

今日の出来事をばやきながら俺は旅館にある露天風呂に向かっている途中だ。

今日の嫌な出来事は風呂にゆっくり浸かりながら忘れよう。

男湯の入り口に入ると、中には半脱ぎのネギが居た。

部屋にいないと思ったら風呂に入ろうとしてたのか（俺とネギは同室）。

「あつ！ どうも、恐山さん」

「ネギも今から風呂か。丁度いいや、一緒に入ろうぜ」

「はい！」

脱衣所で俺とネギは服を脱ぎ、腰にタオルを巻く風呂場のスタイルになる。

扉を開けてみるとそこにはかなり大きい露天風呂があった。

早く入ってみたかったので互いの体に湯を掛け合い、湯船に浸かった。

「風が流れてて気持ちが良いですね」

「ああ、今日の疲れが一気に取れるな。お前も大変だな、新書を届けなくちゃなんのに」

「はい……えっ？」

あつ……いけね、口がスベった。

俺のミスで、隣のネギが驚愕の表情で俺を見ている。

「な、何で恐山さんがその事を……」

「ああ、こうなったちまつたから言うが、俺もお前と同じでこっち側の関係者だ。じじいからお前の話は聞いてる、魔法使いだって事もな」

未だに驚いているネギにこれまでの事情を説明し、何とか分かってもらう事が出来た。

まあ、早く理解してくれて助かるぜ。

じゃあ俺ツチも気兼ねなく話が出来るな。恐山の兄貴、俺ツチはオコジヨ妖精のアルベール・カモミールってんだ

「へえ」…オコジヨの妖精なんて初めて聞くし、初めて見るな」

突然オコジヨが喋っても驚かない自分が、今更ながら怖く思う。少しずつだが、この世界に慣れていつてる証拠だなこりゃ。

強い味方が出来たじゃねえか兄貴。これなら桜咲刹那と対等に渡り合えるぜ

「あつ？ 何だそりゃ。どういう意味だ？」

話によると桜咲を関西呪術協会のスパイだとネギとオコジヨは思っているらしい。

それはもの凄く的外れな考えだな。甚だしいにも程があるぞ。

桜咲の疑いを晴らす為、俺はネギとオコジヨに桜咲の事を説明した。話す内に、1人と1匹の表情がみるみる変わる。

「桜咲はスパイじゃない。仕事を一緒にしてきた俺が保証するから安心しろ」

「はあ……良かった。僕の生徒がスパイじゃなくて」
うっん……

俺の説明にネギは安心した様だが、オコジヨの方はまだ納得していない様だ。

まあしょうがねえか、桜咲も誤解される様な行動を取ってるって言え
ば取ってるもんな。

あれ？ どうしたネギ。脱衣所の方を見て。

「誰か来たみたいですよ。男の先生方かな？」

げっ！ と言うことは、新田が居る可能性があるって事か。
風呂場でガミガミ言われるのは、流石に勘弁だぜ。

「えっ……あれは……うわわわわ……」

脱衣所の方を見ていたネギの顔が急に青ざめた。
コロコロと表情が変わるな、お前は。

「おいおい、どうしたネギ」

やべーよ！ 桜咲刹那が入ってきたんだよ！！ ダイノの兄貴

……………マジで！？

ど、どうなる俺達2人と1匹！？

修学旅行編：第14話【生きてると、自分と似たような奴に会うことってあるよ】

【SIDE：桜咲刹那】

「ふう…」

修学旅行初日から関西呪術協会からの妨害が頻繁に起こってしまった。

その妨害には何とかお嬢様が巻き込まれてはいない様だが、油断は禁物だ。

「困ったな…」

私は桶で湯船の水をすくい、体に掛ける。

今日は妨害の後始末で少々疲れてしまった。

魔法使いであり、担任であるネギ先生を頼りにしていた。

のだが、対応があまりにも不甲斐ない。

敵のこれからの襲撃が心配だが、私には気になることがある。

「……………」

昼間、清水寺で言われた恐山さんの言葉が頭に浮かぶ。

私がお嬢様を悲しませている……そうだとしても私はお嬢様の側にはられない。

話す事さえ出来ない、むしろ資格が無いのだ。私は普通の人間とは違う化け物だから。

「でも……恐山さんは、何処か私と同じ感じがする」

恐山さんは不思議な人だった。最初に学園長先生から紹介された時、確かに普通の人間とは違う違和感を感じた。

まるで私と似ているような……人外の物のような……そんな感じだった。

しかし、学園での生活を見てみると普通の人と何も変わらなかった。その事が私は羨ましかった。誰とでも気兼ねなく話すことが出来る恐山さんが。

何より、お嬢様と普通に話せる恐山さんが……とても羨ましかった。

「私にはそんな勇気が無い……只の臆病者だ……」

何度も話そうと思った。

しかし、いざ拒絶された時の事を考えるととても話す事など出来なかった。

怖い、とてつもなく怖い。

お嬢様に拒絶される事が、化け物と罵られる事がとてつもなく怖い。

自分は化け物だと自分でも認めている。

だが、それをお嬢様に言われる事が何よりも辛く、怖い。

「本当に臆病者だ……私は。………はっ！ 誰だ！！」

考え事をして油断した。露天風呂から何者かの気配がする。

私は手元に置いてあった夕風を取り、構えた。

気配は私から遠ざかる。逃がさない。

「逃げるか。神鳴流奥義……『斬岩剣』!!」

【SIDE：俺】

オコジヨから桜咲が入ってきたと言われ、パニックになる俺等。
こんな所を見られたら100%の確率で誤解されるだろう。
下手すれば桜咲の持っている剣で全員両断されてしまうかもしれん。

俺とネギは何とかバレない様に風呂場から逃げようとした。
だが、突然岩が真つ二つに斬り裂かれた（その際ネギの髪の毛のアンテナも斬られた）。

俺達は瞬間、その斬れ味に身を固くした。

「うわっ！」

「危ねえ！？ 桜咲ッ！！ てめえーこの野郎!!」

もう少し逃げるのが遅れていたら俺とネギは岩もろとも真つ二つに斬られていただろう。

ネギは九死に一生を得て泣いているし、俺なんか思わず大声で怒鳴ってしまった。

桜咲も俺の大声で正体に気付いたらしく、慌てた声を出した。

「えっ！ きよ、恐山さんッ!？」

「そうだよ！ ついでにネギも一緒だ!! 担任と仕事仲間を殺す

「気かッ!？」

怒鳴りながらもネギを泣き止ませていると、桜咲が慌てて俺達の方まで近づいて来た。

俺達の前に来た桜咲は、さっきの事を必死に謝罪する。

「ほ、本当に申し訳ありません！ 怪しい気配がしたもので……」

懸命に謝られてると言いにくい。

ネギは顔を真っ赤にして、必死に桜咲から目を逸らしている。
当の俺も、頭をポリポリと搔いて目を逸らした。

「あ、あの……桜咲さん」

「は、はい？」

「あのな……体隠せ」

「えっ………キヤアアア!?!？」

桜咲はタオルを体にも付けないでこっちに来たので全裸だった。
俺に言われ、桜咲は湯船に急いで体を沈めた。
顔なんかもうゆでだこみたいに真っ赤で滑稽だ。

とりあえず俺は桜咲が近くに掛けておいたタオルを急いで持つてきてやった。

体にタオルを巻き、事態を何とか収集（巻いている間はもちろん、俺達は遠い方を見ていた）。

「えっ……改めて申し訳ありません。ネギ先生、恐山さん」

「たく、次からもっと相手を見て攻撃しろよな。シャレにならねえ」

「恐山さん、もうその辺でいいですよ。僕はもう気にして……」

ひゃああああッ!!

話している途中で、露天風呂に響いた大きな悲鳴。
この声……聞き覚えがあるぞ。

「このかお嬢様!? くそっ!」

悲鳴を聞き、桜咲が一目散に脱衣所に走る。

俺とネギも後を追いかけた。

兄貴達、きつとまた関西呪術協会の奴等の仕業だぜ

確かにオコジヨの言う通りだろう。

今まで質の悪いイヤガラセ程度だったが、今回もその類か?

俺達が急いで脱衣所に駆け込むと、そこに広がっていた光景に、俺達は啞然とした。

「いやあゝん!?!」

「ちよっ……ネギ!? なんかおサルが下着をーッ!?!」

なんともまあ……普通の男が駆け回って喜びそうな光景がそこには広がっていた。

何匹もの小猿が神楽坂と近衛の下着を剥ぎ取るうとしているのだ。

俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ、俺は何も見えてないんだ……。

「あ！　せつちゃん、ネギ君、恐山君！？　あゝん、見んといてッ」

「えうッ！？　一体コレは……！？」

「違う違う違う違う違う！？　俺は何も見えていない！　見ていないんだああー！！」

「な、何をしてるんですか！？　お2人共、しっかりして下さい！？」

何か桜咲の声や神楽坂の声やサルの声が聞こえる気がするが、俺は今それどころじゃない。

こんな事で慌てるとは……俺は戦士としてまだまだらしい……。

「ちよつと3人共、このかがおサルにさらわれるわよ！」

「ひゃあああゝ！？」

神楽坂が大きく叫び、俺は正気を取り戻した。

見ると脱衣所から何匹ものサルが、近衛を連れて行こうとしている。まだ慌てているネギを置いて俺は先に追いかけて、その後から桜咲も続く。

「この野郎！！」

近衛をサルから取り返せる距離まで俺は近づいた。そこから一気に跳んだ。

だが、途中でサル共に方向転換された俺は、そのまま湯船に頭からゆっくりとダイブ。

ドちくしょう！　逃がした！！

「お嬢様！」

俺の後に続いていた桜咲が近衛にすぐ近くに近づいていた。持っている刀を構え、一気に振るった。

「神鳴流奥義……『百烈桜花斬』!!」

構えた桜咲が剣を振るうと、一瞬にしておサルが斬られ、紙になった。

そして腕には助け出した近衛の姿。どうやら傷1つ負っていない様だ。

それにしてもあのおサル……生き物じゃなかったのか。

「このかー!!」

「大丈夫ですか! このかさーん!!」

少し遅れてネギと神楽坂も後を追ってきた。

近衛は大丈夫だ。傷も無いから無事だ、無事。

「せ、せつちゃん。なんか、よーわからんけど……助けてくれたん? ……あ、ありがとう」

「あ、いや……」

近衛がお礼を言うと桜咲の頬がみるみる赤く染まっていく。

そして急に抱えていた手を離し、走り去ってしまった。

あいつ……その行動が近衛を悲しませる原因だって言うのが分からないのか。

今の近衛の顔は寂しそうであり、悲しそうだった。

「せつちゃん……」

「ちょっと……何よ、今は」

……今更なんだが、湯船にダイブした俺って蚊帳の外？
だれも声を掛けてくれないのが、凄く寂しいんだが。

風呂から出た俺達は浴衣に着替えて一息ついた後、近衛から桜咲との関係について聞く事が出来た。

近衛と桜咲は小さい頃によく遊んだ幼なじみらしく、京都の広い屋敷で育った近衛にとっては初めての友達だったらしい。
しかし、麻帆良に引越してからあまり会えず、中学1年の頃にやっと再開出来たのだが、昔の様にはいかなかったとの事。

近衛からの話が終わり、俺達の周りが静寂に包まれる。
声を掛けようにも掛けられないと言った状況だ。

「何かウチ、悪いコトしたんかなあ。……せつちゃん、昔みたく話してくれへんよーになってて……」

「このか……」

「このかさん……」

「……………」

笑顔だが、その近衛の目には薄い涙が浮かんでいた。辛いつて事が伝わってくる。

あの野郎……こんなに待ってくれている友達がいるってのに。泣か

せてどうするんだよ。」

「やっぱりこっちの方が動きやすいな」

俺はネギと神楽坂と別れて部屋に戻った。

連中が近衛を連れ去ろうとしたって事は、このまま終わる気は無いって事だ。

また襲撃があるかもしれないと思った俺は浴衣から動きやすい私服に着替えた。

そしてサーベルを持ち、ここら辺一帯をとりあえず偵察する事にした。

「なるべく新田とかには見つからないようにしとかないな。外寒そうだし、コート着ていくか」

買っておいた黒いコートを羽織り、旅館の出入り口に向かう。

すると、通りかかったロビーでネギ、神楽坂、桜咲の3人が話していた。

「あつ、恐山さん。何処かへ行くんですか？」

「偵察だ。連中がまた襲ってくるかもしれないねえからな。お前等は何を話してんだ？」

「桜咲さんに、襲ってきた敵について教えてもらってたのよ」

成る程。敵の事を知るのはとても重要だ。

ん？ 一般人の神楽坂に教えても良いのか？

大丈夫だぜ。アスナの姐さんは兄貴のパートナーだからな。ついでに恐山の兄貴の事も話しておいたぜ

「まさかアンタもだったとはね。正直驚いたわ」

いやいや、俺もお前が関係者で驚きだよ。

ついでに後から来た俺も、桜咲に関西呪術協会の事について簡単に説明してもらった。

大体は理解出来たが、敵の内情も複雑のようだった。

「よし！ 3 - A ガーディアンエンジェルス 防衛隊の結成です！！ 関西呪術協会からクラス
のみんなを守りましょう！！」

何か妙な部隊が結成されたなあ。

ガーディアンエンジェルスか……神楽坂はその名前にしきりに文句を言っていた。

だが、俺的には。

「その部隊名……良いな」

「ですよね！ ですよね！」

「「ええ〜……」」

いいじゃねえか、某有名ロボットゲームに出てきそうな名前だよ。神楽坂と桜咲がジト目で見ているが、とりあえず無視する。

「早速僕、外の見回りに行ってきます！」

ネギが勢いよく外に飛び出していった。

俺もネギと一緒に見回ろうかと思ったが、今すぐに話したい奴がいるから止めておいた。

「桜咲。ちょっと話したい事があるんだが、時間良いか？」

「あ、はい。それじゃあ神楽坂さんは、先に部屋に行ってて下さい」「うん。分かった」

ネギも外に行き、神楽坂も部屋に行ったのでロビーには俺と桜咲の二人だけだ。

互いに向かい合って座り、沈黙が続く中で俺は口を開いた。

「お前……友達なのにいつまで近衛を悲しませる気だよ？」

「！？　そ、それはどういう意味ですか？」

「近衛から全部聞いた。小さい頃によく遊んだ友達だって事、近衛にとって初めての友達だって事をな」

「……………」

桜咲は黙ったままだが、俺は話を続ける。

「お前が昔みたいに話してくれるのを今でも待ってるんだぞ。良い友達じゃねえか。なのに何でお前は友達を悲しませんだよ？」

「わ、私も考えました……何度もお嬢様に話しかけようと、話そうと思いました。けれど……私はお嬢様とは違うんです」

「何が違うんだ？　同じ人間じゃねえか。違う所なんか1つも……」

「違うんですッ！！　何もかもッ！！」

「ッ！」

「私は……人外の者なんです。化け物なんです。だから……お嬢様の側にはいられません」

……こいつも俺と同じって事か。

俺も確かに人間とは言い難いが、コイツの方が幾分人間らしい気がする。

ちなみに言えば、どこら辺が化け物なのか教えて欲しいくらいだ。

「そうか。それじゃあ俺も言うが、俺もお前と同じで人間じゃないけどよ、それってそんなに気にする事か？ 逆にお前が気にしすぎなんじゃねえか？ 自分の事を話せないって事は友達を信じてないからじゃねえのか？」

「そ、それは……」

桜咲の表情に、動揺の色が広がる。

「拒絶された時の事はばかり考えてたら前に進めねえよ。時には勇気を出して話してみる事も大切だ。お前をずっと待ってる友達、近衛は簡単にお前の事を拒絶する奴なのか？ 仲良く遊んでたんだろ？」

「お嬢様は……このちゃんは……」

顔が俯き、身体がブルブルと震えている。
今までの事を思い出しているのだろうか。

「近衛は良い奴だ。昔の友達をずっと待ってる奴なんか今時いないぞ。お前が訳を話せばきっと分かってくれるぜ。お前とまた昔の様に話したいって、泣きながら言ってた。あいつの気持ち、分かってやれ」

「どうして……どうして……恐山さんはそこまで私とお嬢様の事を気に掛けてくれるんですか？」

眼尻に涙を貯めた桜咲が訊いてきた。

俺は自嘲気味に笑うと、白い天井を見て言った。

「そうだな……お前が昔の俺と似てるから、かな？」

「……えっ？」

「お前と同じように、周りを避けて、バカばかりやってた俺と……な」

「……………」

俺が吹いた言葉を終わりに、この場に何とも言えない雰囲気の流れた。

俺も桜咲も、沈黙を守った。それから数分後、俺はこの場を切りあげた。

「悪かったな。俺から誘っておきながら、最後は有耶無耶にしちまつて」

「いえ……気になさらないでください」

「とにかく、俺が言いたかったのはそれだけだ。後は、お前の気持ち次第だ。上手くやれよ」

「……………はい」

そう吹くと、桜咲は神楽坂が待っている部屋に向かった。

俺って奴あ、自分の事を棚に上げちまったな。

まあお節介な話も終わったし、俺も偵察に行くとするか。先に行ったネギの後を追いかけないとな。

修学旅行編：第15話【初日からの戦いは……夜中か】

【SIDE：俺】

桜咲との話が終わった俺は、先に見回りに飛び出して行ったネギを探しつつ、辺りの偵察をしている所だ。

ふう〜……コートを着てきて正解だった。やっぱり夜はなかなか冷える。

それにしてもネギの奴、何処に行ったのかな？

「そんな遠くには行っていないと思うんだけどな。でもあいつ、まだ小さい子供だし」

まあ喋れるオコジヨも付いているからあまり心配はいらないか？
変な奴に絡まれてもオコジヨが怒鳴れば、裸足で逃げて行くだろう。

「もう少しこの辺りを……ん？ 何だありゃ？」

前方から何かが猛ダッシュでこちらに近づいてくる。

人か？ いや、普通の人間にしてはでかすぎる。

それに心なしか、尻尾も生えている様な……。

「あら、ごめんやす」

「なっ!？」

猛ダッシュで近づき、俺の上を勢いよく跳びこえていったのは……
猿だった。

しかも飛びきりデカイ大猿であり、口の中にはメガネを掛けた女の

顔があつたし、喋った。

京都にはあんな気持ち悪い妖怪が出るのか？

しかしあの猿、何かを抱えていた様な……。

「もしかしてあの猿、関西呪術協会の……」

「えゝいッ！！」

「なっ！」

突然間抜けな声と共に、俺は何者かに剣で襲撃された。

もう少しサーベルのガードが遅かったら、二の腕を切断されていたかもしれない。

「いきなり仕掛けてくるとはな。何者だデメエ……」

「どうも、おはつに。神鳴流剣士の月詠です」

神鳴流剣士……桜咲と同じ流派か。

……全然そうは見えねえ。間抜けな格好だし、喋り方も気が抜ける様な喋り方だ。

「何で俺を狙う？」

「雇い主さんから貴方の足止めを頼まれました。お兄さんからは何か異様な力を感じるのやっかいそうだから、そう言ってみました」

なるほど、関西呪術協会の連中はアホばかりじゃないらしい。
ちゃんと頭の回る奴が居るって事か。

「ウフフ……お兄さん、強そうだから楽しみや。本気でいかせてもらいますわ」

月詠とか言うこのメガネチビ女は持っている2本の刀を構え、姿からは想像もつかない程の殺気を放った。

さっき俺を斬りつけてきた太刀筋からも解ったが、コイツ……なかなかの使い手だな。

「へえーお前も結構やる様だが……俺にはまだ及ばねえよ。チビ女」

俺も被せていた布を外し、サーベルを構える。

足止めって事は、連中はもう何らかの行動に出てるって事だ。

あくまで想像だが……あの猿が怪しい。

ネギ、神楽坂、桜咲、近衛の4人は大丈夫なのか？

「とぉー……」

先手を取ったのはチビ女の方、左に持った長刀で突きを入れてきた。すかさず俺はサーベルで防ぐが、もう一方の短刀で斬りつけてきた。その攻撃を俺は右手で女の手を掴み、ギリギリで斬られるのを防いだ。

「2刀流か……扱いが上手いじゃねえか」

「お褒めに頂いて光栄です」

俺とチビ女との壮絶な斬り合いが続くが、俺はこのチビ女に付き合いつつもりは毛頭ない。

4人が心配で今すぐにでも旅館の方に戻りたいが、コイツがそうさせてはくれない。

ちっ！ 状況が知りてえ、詳しい状況が。

「お嬢様ーッ!!」
「このかーッ!!」

あの声はネギ達だ。あいつらは無事だったんだな。
だが近衛の名を呼んでるって事は……もしや!

「ネギ! 神楽坂! 桜咲! どうした!? 何があった!?」
「恐山さん!?!」
「お嬢様が……お嬢様が攫われました!」

ちくしょう! やっぱりか!
ちっ……事態は最悪って事だな。

「よそ見はあきまへんよ、お兄さん」
「なにっ!? ぐおっ!」

飛びかかってきたチビ女の長刀が俺の右腕を貫き、血が滴り落ちる。
くそっ! ついよそ見をしちまった。俺もトレーニングが足りない。

「きよ、恐山さんッ!?!」
「俺に構うな。お前等は近衛をさらった奴を追え! 俺もこのチビ女を倒したら、すぐにお前等の後を追う。だから行け!」
「で、でもアンタ!? そんな大ケガを負って、戦えるわけないじゃない!?!」

「アホか! 俺に構ってたら、近衛を取り返せなくなるぞ! 状況を考えて、今やるべき事をやりやがれ!」

俺が大声で怒鳴ると三人は俯いた。
本当は俺を見捨てたくないのだろう、手がブルブル震えている。

「……………分かりました。恐山さん、必ず追いかけてきて下さい。必ず、必ずですよ」

「ああ、任せとけ。約束は必ず守る」

悔しそうに顔を歪めながらも三人はこの場を後にした。

俺は三人が去ったのを確認し、腕の出血を確認する。

出血は少し多いが、腕は充分に動かせる。

元TFで本当に良かったぜ。

常人ならとつくに倒れてるな、こりゃ。

「茶番はお終いですか」。ほなら、再開といきましょう。戦いの続きを」

薄気味悪い笑みを浮かべやがる。

……………さつさと終わらせるか。

今の俺にはコイツに長く付き合ってやれる程の時間がねえ。

「俺はな、テメエみたいな奴を見ると虫酸が走るんだ。特に、戦いを遊びとしか思っていない奴はな！」

俺は叫んだと同時に、チビ女との距離を詰めようと接近した。チビ女は長刀で縦に斬りつけ、反撃をしてくる。

軽く額を斬られたが、次に来るであろう短刀での攻撃を右手で掴んで封じる。

距離を詰める事に成功した俺は左手に持ったサーベルを捨て、鳩尾に拳を打ち込んだ。

「力……………ハッ……………」

「あ痛……………ったく、未恐ろしいチビ女だぜ」

刀を落とし、鳩尾を押さえてチビ女はうずくまった。
かなりの勢いで打ち込んだので呼吸が上手く出来ないのだろう、
とても苦しそうだ。

「まあ…そのまま大人しくしとけ。無理に動くと痛むし、呼吸も出
来ねえぞ」

「ハッ……まっ……まって……」

微かに聞こえるチビ女の声を見殺し、捨てたサーベルを持って俺は
ネギ達の後を追う。

あいつら…無事なのか？

電車に乗り、駅に着いた俺は降りて先に進む。何故俺が迷わずに後
を追えたかと言うと……先に行った三人が残していつてくれた光る
マークがあったからだ（ちなみにマークはオコジヨの形であり、降
りるべき駅の看板にも付けていつてくれたのでかなり助かった）。

「あいつ等は……いた!!」

奥に進み、沢山の階段がある所に差し掛かると戦っている三人を見
つけた。

神楽坂はやたらと大きい熊と戦ってるし、桜咲はメガネを掛けた長
身の女と対峙していた。

「お前等！ 無事か！！」

「恐山さん！」

恐山の兄貴！ 来てくれて助かるぜ！

「おう。約束は必ず守るって言っただろ？」

ネギの頭に手をポンと置き、俺は神楽坂の元へ向かう。

果敢に戦ってはいるが、危なっかしくて見てられない。

ここは桜咲の援護に向かわせるのが無難だろう。

「ほら、お前は桜咲を助けに行ってやれ。この熊野郎は俺がやる」

「何言ってるのよ！ アンタ、前に会った時より傷が増えてるじゃない！ それに血も……」

「大丈夫だ。俺はこんな事で死なねえよ。さっさと行け」

神楽坂を桜咲の元に行かせ、俺は熊野郎と対峙する。

間抜けな姿だが、敵は見かけで判断するなって事をさっきも思い知らされたばかりだ。

油断せずに行くか！

それと……あえて言わなかったが、神楽坂ってハリセンで戦うんだな。

「おらあああ！」

俺は空中に飛び上がり、熊野郎の頭目掛けてサーベルを振り下ろした。

だが、熊野郎の爪で受け止められてしまった。

【クマー】

「負けるか……ぐおおお!!」

力を入れ、サーベルを受け止められていた爪を弾いて一気に斬り下ろした。

結果、熊野郎は縦に真つ二つに両断され、煙になって消えた。

「……コイツは見てくれただけだな」

熊野郎を片付けた俺は神楽坂達の方を見た。どうやらまだ近衛は助け出せていない様だ。

よく見ると、メガネ女は近衛を自分の身を守る盾にしている。

神楽坂と桜咲もそのせいで敵を攻撃出来ず、ネギもどうすればいいのか迷っている。

それにあのメガネ女の面、何所かで見たような……。

あつ! あの時、サルの口から見た女だ!

「テメエ、前に俺が見たあの猿だろ!! 近衛を盾にしゃがつて、卑怯だぞ!」

「ホホホ、そういえば会いましたなあ。ウチは近衛お嬢様を持ち帰れるのならどんな手でも使ったるわ。それにしてもアンタ強いなあ。風呂場で見た時にただ者やないと思うて月詠はんに足止めを頼みましたけど、ここに来ないと言う事はやられたんやな。それに熊鬼もあつという間に倒してしもて、感服するわ」

「やかましい。テメエに褒められても、ちっとも嬉しくはねえんだよ」

「こ……このかをどうするつもりなのよ……」

神楽坂の問いにメガネ女はチビ女と同じくらいに薄気味悪い笑みを浮かべた。

あの笑み……虫唾が走るほど、本当に気に入らねえ。

「せやなー……まずは呪薬と呪符でも使て口を利けんよにして、上手いことウチらの言うコトを聞く操り人形にするのがえーな。くつくつく……」

あの女……俺の目の前でそんな事を言うなんてスゲー度胸があるじやねえか。

もちろんネギ、神楽坂、桜咲も俺と同じ気持ちだろう。

あの女に対する怒りって言う気持ちに、な。

「このまま逃げられればウチの勝ちやな。ほなな、ケツの青いクソガキども」

その言葉を最後に俺の中の何かが完全にブチ切れ、メガネ女に向かっていった。

ネギ達も同じタイミングだった。

ネギが呪文を唱えてメガネ女の服を消し去り（近衛の浴衣も一緒に消え去ってしまい、宙に浮いて墜落しそうになったが、ネギが魔法で浮かせたので墜落せずに済んだ）、その後を神楽坂が頭をハリセンで叩き、最後に桜咲が得意の神鳴流剣技で吹っ飛ばした。

「な、なな……」

「おいテメエ……」

「ヒイ!?」

吹っ飛ばされて参ってるメガネ女の首根っこを掴み、サーベルを頬に当てた。

メガネ女は完全に俺の姿に怯えている。

なんせ怒りレベルMAXで睨みつけ、右腕と額から血を流しているから迫力は満点だろう。

「またこんな事をしてみやがれ。次からは完全にぶっ潰してやるからな」

「ヒィ……」

手を離してやるとメガネ女は何処からともなく札を取り出し、額に2と書かれた大猿を呼び出した。
その尻尾に掴まり、「お、おぼえてなはれー」と小悪党にお決まりのセリフを言つて空中に飛び、逃げていった。

「あいつめ……」

「追う必要はありません。神楽坂さん」

確かに。追いついたとしても、敵が待ち伏せしているかもしれない。深追いは禁物だ。どんな戦場においてもな。

敵を追い払った俺達は倒れている近衛の安否を確認する。

メガネ女が言っていた呪薬や呪符なんか使われていないか心配だ。

「このか!」

「このかさん!」

「お嬢様!　しっかりして下さい!　お嬢様!」

俺は静かに様子を見守る。こういう場面はどうにも苦手だ。

俺が経験してきた中ではこういう場面は最悪の結果しか待っていない

かったが……。

「ん……せつちゃん……？」

「お嬢様……」

「あーせつちゃん……ウチ、夢見たえ……。変なおサルにさらわれて……でもせつちゃんやアスナ、ネギ君や恐山君が助けてくれるんや……」

ふう……良かった、いつもの近衛だ。
どうやら最悪の結果は免れたようだ。

「もう大丈夫です。このかお嬢様……」

桜咲は安堵の笑顔、ネギと神楽坂もホッとした様子だ。
本当に良かったな、お前等。
ん？ 近衛が何か言おうとしているな。

「よかったー。せつちゃん……ウチのコト嫌ってる訳やなかったんやなー……」

「えっ……そりゃ私かて、このちゃんと話し……！！？」

どうやら桜咲は俺の視線に気付いたらしい。
良いタイミングだ、言え！ 仲直りしろ！
近衛ならきつとお前の事を解ってくれる！

無論、ネギや神楽坂もな。

【SIDE：桜咲刹那】

恐山さんの視線を感じる。そして、恐山さんが私に話してくれた事が頭の中を駆け巡った。

勇気を出して……お嬢様を信じて……受け入れてくれると信じて……全てを話すこと。

そう思った時、私の口は自然と開き、言葉を紡ぎ出していた。

「……………お嬢様、お嬢様に聞いてもらいたい事があります。もちろん他の人達にも」

話そう……話してしまおう。

このままお嬢様を悲しませるなら、泣かせてしまふなら、いっそ話してしまおう。

そして拒絶された時は……潔く、お嬢様の目の前から消えよう。

「お嬢様……私は化け物なんです！ 人間じゃないんです！」

「えっ……？ せつちゃん……？」

「これを……これを見て下さい……」

私は見せた。私が化け物であると言う証拠を。人間ではないと言う証拠を。

鳥族のハーフである証拠を、白い翼を……。

「これが私の正体……化け物です。今までお嬢様から逃げていたのは……嫌われるのが怖かったからなんです！」

私の周りだけ無音の世界のような感じがした。
お嬢様の目を見るのが怖い……周りの目が怖い。

「でもっ……お嬢様を守りたいという気持ちは本当です！　こんな私でも……化け物の私でも受け入れて下さるなら……これからも……護衛に付かせて頂けませんか……」

怖い、とてつもなく怖い。

これから返ってくる言葉が怖い、耳を塞ぎたい。

「えいつ！」

「あ痛……お、お嬢様？」

お嬢様が突然私の頭を叩いた。

予想外の行動に、私はすぐに対応が出来なかった。

「アホやなあ……せつちゃんは」

「お嬢様……」

「ウチがそんなコトでせつちゃんを嫌いになる訳がないやん。キレイなハネ……天使みたいやん」

私のこの姿が……綺麗？

お嬢様が……このちゃんが……私を……。

「それに……どんな姿をしても、せつちゃんはせつちゃんやろ？
ウチ、絶対嫌いになったりせーへんて」

ああ……私の目に涙がこみ上げてくるのが分かる。
心の片隅でひっそり期待していた答えを……お嬢様が言ってくれた。

「うち……うち……お嬢様の……このちゃんの側にいてええの？」
「当たり前やん。また昔みたいに遊んだり、話したりしよう。せつちゃん」

「このちゃん……ウツ…ウツ」

私の目から涙が溢れ、頬を伝う。嬉しくて堪らない。
このちゃんが受け入れてくれたのが、嬉しくて堪らなかった。

「ネギ君も、アスナも、恐山君も、せつちゃんのコトを嫌わんといで。お願いや」

「そんなの当たり前よ！ それに、翼が背中から生えてるなんてカッコイじゃない！！」

「僕も嫌う訳がないです！ 綺麗ですよ、桜咲さん」

ネギ先生も、神楽坂さんも、ありがとうございます。

……恐山さんは、どうなのでしょうが。

「……嫌いになったりしねえよ」

後ろを向いていました。どんな表情をしているか、少し気になりました。

何故か分かりませんが……ダイノさんは受け入れてくれたと、そう感じました。

良かった……本当に良かった。今の私はこれ以上なく幸せだ。

【SIDE：俺】

近衛と桜咲が無事に仲直りした。昔の仲に戻った。

俺はこの出来事が、何故か自分のことのように嬉しかった。こりゃあ俺って本格的にサイバロン色に染まっているな。

そんで今俺達は寒い中、旅館に帰っているところである。

近衛はネギの魔法で服が消えて全裸だった為、俺のコートを着せてやった。

更に言えば、俺の負った傷はネギがこっそり魔法で治してくれた。

「あ、あの……恐山さん」

「ん？ 何だ桜咲」

先頭を歩いていた俺の隣に、オズオズと桜咲が寄ってきた。何だか変に狼狽してねえか？

「あ、あ、ありがとうございます。貴方が言ってくれなければ、私は……」

ああ、お礼か。別にお礼されることはしてない。

出来たチャンス桜咲自身が生かしただけのことだ。

昔の俺には、なかなか出来なかったことを、桜咲はやってのけただけだ。

「別に。近衛に全てを告白する勇氣を持てたのはお前の力だ。修学旅行は長え。これからたっぷり、近衛や他の奴等と遊べばいいじゃねえか」

「恐山さん……はい!!」

元氣よく返事をした桜咲に俺は自然と笑顔になるのを感じた。
良い事をする気分が良いってのはどうやら本当らしい。昔の俺に
は考えられない事だな。

修学旅行初日は疲れたが、色々と充実した日だったな。

あゝ……そうだ。

今頃旅館内を見回ってる新田からどう逃げようかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446c/>

Life Is Reborn

2010年10月9日03時48分発行